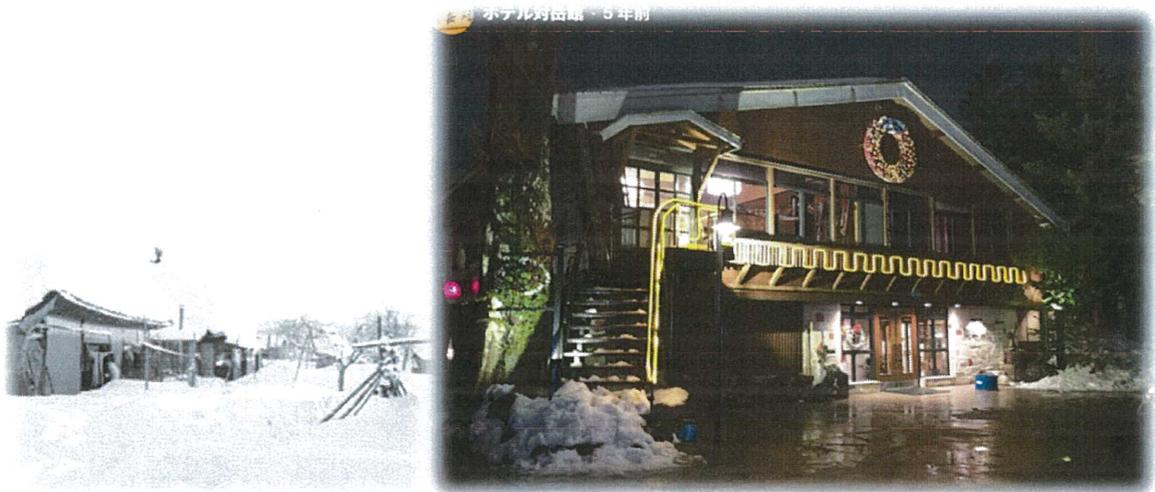


私の山歩き

岳、友、家族

丸山 庄司



目 次

1	はじめに	1
2	私の山歩き	2
3	兄妹3人で燕岳～槍ヶ岳の縦走	7
4	北アルプス涸沢でのスキー合宿と登山	9
5	後立山縦走	15
6	長野営林局のスキー仲間と裏銀座縦走	17
7	槍ヶ岳・北鎌尾根の登攀	19
8	親友と風吹き大池～白馬岳～唐松岳縦走	23
9	二人で表銀座～北穂高岳の縦走	25
10	書道家・伊藤東海先生と鹿島槍ヶ岳に登る	27
11	公務出張で燕岳に登る	29
12	白馬の雪渓で初めてのスキー合宿	31
13	針ノ木大雪渓の落石調査	33
14	針ノ木大雪渓でのサマー合宿	35
15	風吹き大池～池原集落に出る	37
16	忘れられた山系・烏帽子岳～針ノ木岳の縦走	39
17	5月連休・富士山に登る	41
18	北アルプス山岳救助隊と大町営林署班	43
19	11月の鹿島槍遭難の捜索	45
20	槍ヶ岳・小槍、遭難者の遺体収容	47
21	山岳遭難救助訓練が八方尾根で行われる	48
22	銀メダル・猪谷千春選手を迎えて 全日本選抜スラローム大会開催	50
23	志賀高原から万座・草津のスキーツアーを体験	51
24	良き思い出の大町営林署勤務	53
25	背景概観・白馬山案内人組合誕生前史	55
26	昔の雪国の生活	60
27	信州の中山間地には「自然と文化」がある	62
28	父・与兵衛の影響で登山が好きになる	65
29	大阪大学山岳部の北アルプス縦走に同行して	67
30	5月の白馬大雪渓を滑る	71
31	白馬岳のヘリスキー	73
32	あとがき	78

はじめに

私の若いときを振り返ると、スキーと山歩きが大きなウェイトを占めていることに気づく。

白馬という環境と、山案内人だった父・与兵衛の影響があったのだと思う。白馬高校を卒業して大町営林署に10年勤めたが、国有林の管理運營業務の中でも岳に登る機会が多かった。

長野営林局スキー部に所属していたこともあり、涸沢のスキー合宿に6年通ったときや業務の合間や休暇を利用しての登山もした。

また、遭難救助などの業務登山も多く、“岳”に入る環境にあった。

年月が過ぎて私も高齢となり、妻の永子と少しの野菜作りなどのんびりとした日々を過ごしていた。ところが、永子が体調を崩し、入院で家を離れることになった。

私は、退屈しのぎと気晴らしに、孫の由愛から教わったパソコンで、若かりし頃の山歩きの日記やメモの中から記憶をたどることにした。以下、そのメモである。

2024. 6

丸山 庄司



私の山歩き

大阪大学山岳会

名誉会員 丸山 庄司

山との出会い

私が白馬岳に登ったのは中学1年生のときだった。ご来光の躍動感溢れる、夜明けの素晴らしさに感動したことが今でも脳裏に焼き付いている。

中学2年生の夏、阪大（大阪大学）山岳部の奥又白の合宿に連れてってもらい、徳沢園のベースキャンプでテントキーパーをしていたら、家田さんと加藤さんが奥穂高岳に連れてってくれた。合宿の帰りは徳本峠を越えて、島々駅まで歩いたがとても長かった記憶がある。

高校1年生のとき、父・与兵衛に連れられて、テントで白馬岳から不帰、唐松岳を歩き八方尾根を降りた。

その直後、阪大山岳部の人たちにお世話になって、針ノ木峠を越え、黒部川から東沢を遡り、裏銀座から槍ヶ岳、大キレットの縦走を体験した。これが私の岳にのめり込むきっかけになったと思う。（文末の写真）

高校3年生の夏休みには、スキー板を買うために、友人3人と白馬山荘への荷揚げ（ボッカ）のアルバイトをした。朝5時、我が家を出発、白馬山荘に12時頃着き、帰りの白馬尻までは「走り歩き？」で駆け降りた。憧れの「合板スキー」を買うことができ、登山にも自信がついた貴重な経験だった。

夏の雪渓でスキーと山歩き

高校3年生のとき、涸沢の雪渓でのスキー合宿に参加した。全日本スキー連盟が日本のトップ選手を選抜して行った初めての雪渓でのスキー合宿で、猪谷千春さんなど10数名と長野県は地元ということで高校生5名が選ばれ私もその中に入り参加した。雪渓の固い雪面にポールセットされたロングコースは、オフシーズンの効果ある練習になった。

翌年春、高校を卒業し大町営林署に就職した。長野営林局には、日本のトップクラスの「長野営林局スキー部」があり私も所属することになった。合宿は同じ涸沢で行われテント生活であった。1日目の夕方は足慣らしで明日に備えた。しかし、2日目からは台風で大荒れとなり、一度も滑れず合宿の日程は終了した。

晴天の下、涸沢を離れる。しかし横尾本谷の橋が流失のため、屏風岩沿いにスキーを担いでブッシュと闘いながら下りようやく梓川にたどり着いたが、最悪のスキー合宿であった。

翌年の2年目からは、晴天に恵まれ十分な練習ができた。練習を1日だけ

さぼって奥穂高岳に登った。3年目は奥穂高小屋から北穂高岳の縦走をした。4年目は前穂高岳の5・6のコルからジャンダルムまで行き、奥穂高岳からザイテングラートを下りた。

メンバーの一人、藤島幸造（世界スキー選手権大会・日本代表）はすっかり山好きになってその後も白馬一帯などあちこちを案内した。

裏銀座コースを案内

藤島幸造、江遠要甫（オリンピック複合競技・日本代表）、田原久と私、いずれも長野営林局スキー部の同僚である4名で久しぶりに登山することになった。

職場の女性、木曾の1名、大町の2名が加わり7名で裏銀座を3泊4日の縦走。1泊目は烏帽子小屋。2日目早朝出発するも天候が急変した。10時頃から暴風雨となったが宿泊予定の三俣蓮華小屋には12時ころで早く到着した。

ほっとしていたら、木曾から参加の女性が激しい腹痛を起こし苦しがる。同宿のなかにお医者さんがいたので診察してもらおうと、急性盲腸炎の疑いといわれる。1時間ほど戻ったところにある東京薬科大学のテントにいる、山案内人である細野（現八方）の先輩の顔を思い出し、風の中を走った。事情を話し、薬をいただき飛んで帰ると、痛さはあるが大丈夫だと本人は言うが、無理に薬を飲ませて様子を見ることにした。

翌朝、痛さが和らぎ、元気な顔を見せホッとす。順調に歩き3日目は槍ヶ岳・肩の小屋。軽装で山頂に登る。ガスの中だったがみんな喜んでくれた。翌日は快晴に恵まれて槍沢を下り、松本で藤島ら木曾福島組と別れ大町に帰った。

翌日、大町営林署に出勤したら、野口五郎岳あたりで強風雨による遭難（死亡）があり救助隊の出動で大変だったらしい。風雨が強くなり始めたころ、東沢乗越しあたりですれ違ったパーティだったと思われた。

余談であるが、木曾から参加の女性の腹痛の原因は便秘で、環境の変化によるものとのこと。正常に戻るまで1週間もかかったとか。笑い話で終わりホッとすした。

大町営林署に10年間務める

最初の5年間はスキー大会など、選手として全国を飛び回っていた。後の5年間は「職場復帰？」して通常の勤務に戻った。

私の職務は、国有林の立木売買の際に価格を算定する担当であった。当時

は黒部ダム（黒四）建設で籠川谷は様変わりするほど立木が伐採され、価格算定に多忙を極めた。黒部ダムの大町トンネルで破砕帯があり工事が難航したところだった。（後に映画「黒部の太陽」が製作された）

そのころの4月、署長命令で山好きの林野庁の上司を案内した。富山から入り、立山連峰の雄山山頂から黒部側に回り込み、たんぼ沢雪溪の最上部からダム建設現場の黒部川に滑り降りた。残雪が多く楽しい「春スキー」であった。帰りは開通したばかりの、大町トンネル口まで登り大町市に戻った。

また、休日を利用して北アルプスを、単独であるいは職場の友人などと歩き回った。

9月上旬に、同僚の遠山鎮彰、田原久の3人で槍ヶ岳・北鎌尾根を登攀した。1日目は湯股温泉から天井沢を遡り、北鎌沢を眺めながら無人の日大小屋でシュラフに潜り込む。翌日の早朝、北鎌沢を登り順調に独標の下に着いた。独標のルート探しをしていたら、千丈沢側にトラバースできるルートを見つけた。断崖絶壁の壁に幅10センチほどの棚が真横に伸びていたのだ。両手両足を交互に少しずつ横に移動する。カニの横這いで慎重にトラバースし、3人が無事渡り終えた。

後日談だが、塚本閣治さんの「日本の山々の写真集」に、「独標の岩峯は是を右に巻いて直登を避けることもできる」とあった・・・

あとは若さに任せて、両手両足を駆使して3人で黙々と急な岩壁を登る。どのくらいの時間が過ぎたのだろうか。急に傾斜が緩くなった。トップの田原が「祠がある。頂上だ」と叫んだ。頂上には数人の登山者がいたが、霧の中、予期しない所から出てきたので驚いていた。私たちは好天の幸運にも恵まれ、槍ヶ岳の頂に立つことができた。下山は裏銀座コースの西鎌尾根を辿り、新たにできた伊藤新道を歩き湯股温泉に戻った。

公務で燕岳に登る

燕山荘の経営者赤沼敦夫さんが、昭和36年（1965年）高瀬溪谷側の沢から燕山荘までの引水計画を立て申請した。高低差300m、全長1kmに及ぶ距離であった。

大町営林署の庶務課長から燕岳への出張を命ぜられた。計画された燕山荘の引水工事に使用する土地が国有林であり、樹木の伐採許可のためである。初めての燕岳は、公務登山となったが、赤沼敦夫さんとはスキー仲間なので楽しい再会となった。

その後は、妻や弟妹などと表銀座から槍ヶ岳、北穂高岳の縦走などした。振り返ると白馬連峰、針ノ木岳、表銀座、裏銀座コース、涸沢を拠点に穂高

連峰などを歩いていた。

大町営林署勤務9年目の8月、「忘れられた山」などと言われる、烏帽子岳～船窪小屋間を営林署の友人と歩き、小屋主の松沢宗弘さんと旧交を温めた。これで白馬岳から奥穂高岳まで繋がったことになる。

長野県が認定する、山岳ガイドの試験を受けたら、通常のご案内範囲は「白馬岳一帯」なのであるが、「北アルプス一帯」の合格証に驚いた。白馬連峰以外でも歩いていたのが認められたのだという。

その後、成城学園中学の団体登山で、表銀座コースのご案内を何年も続けた。また70歳の書道家を、白馬岳～唐松岳、鹿島槍ヶ岳や針ノ木岳などに案内した。冷池小屋に宿泊した際、看板に「冷池小屋」と書いていただき、小屋主の柏原さんに差上げて喜ばれたこともあった。

山岳救助隊「大町営林署班」

北アルプス北部山岳遭難対策協議会には、白馬班、大町班、大町営林署班があった。私は最初、大町営林署班所属だったが大町営林署退職後は白馬班に所属していた。

振り返れば、1962年の11月、北鎌尾根独標付近で救助隊員が救助中に転落遭難死する事故があった。私もそのとき、遭難者の捜索で鹿島槍ヶ岳の冷沢に入っていて無線で知った。遭難死したのは同郷である白馬班の白河敏男隊員で痛ましい事故であった。

何年だったか思い出せないが、8月上旬署長室に呼ばれ槍ヶ岳への出張命令を受けた。槍ヶ岳の小槍付近で1年前行方不明となっていた遺体が見つかりその搬出処理である。メンバーは、大町警察署、救助隊大町班と救助隊大町営林署班で私を含め3名であった。

湯股温泉を早朝に出発し、千丈沢を遡り小槍を目指してガラ場の急斜面を3人で直登した。遺体は小槍下部のわずかな棚に横たわっていた。なんとか梱包し、急斜面を3人で互いに確保し合いながらダケカンバのある地点に降ろすのにとっても苦勞した。現在だとヘリコプターでの収容なのだが……。そこには別の隊により、周囲のダケカンバを伐採して積み上げて茶毘の棚が作られ、18ℓの重油がおいてあった。

3人で茶毘を済ませ、すべての任務は終了した。

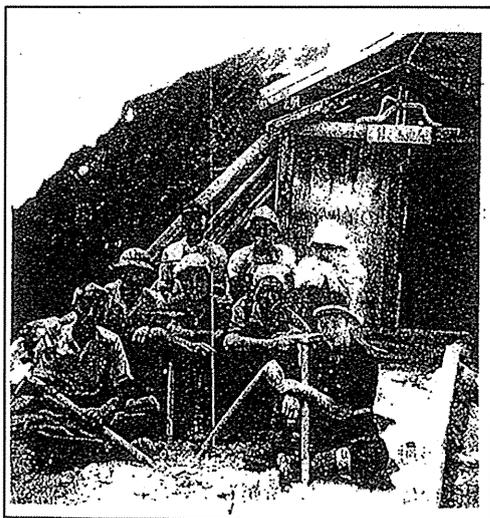
その後、大町営林署を退職してからも救助隊白馬班に所属して何度か救助で出動した。振り返ると、当時も家業の外に、冬はスキーの指導、夏は山岳ガイド、山岳遭難救助隊活動なども多忙であった。

しかし、それまで以上に全日本スキー連盟に関係するようになり、特に長

野オリンピック招致から開催まで10数年、気が付いたら年齢も重ね、山から離れていた。

改めて思い起こせば、私の山歩きの原点は「大阪大学山岳会」の皆さんに育てていただいたことにあり、それを糧に活動してきたを忘れることはない。そして今もお世話になっている。心から感謝、感謝である。

会報の原稿



S25.7.27(高校1年生)
針ノ木小屋にて
阪大山岳部に同行して

後列3人:丸山庄司・坪井圭之助・大島輝夫

前列5人:四宮誠祐・大久保勝巳・家田千尋・松久博・細見一仁



現在の針ノ木小屋

兄妹3人で燕岳～槍ヶ岳の縦走

妹の宗子の、「兄ちゃ、南の山へ連れてってくれ」の一言で、兄妹3人で「燕岳～槍ヶ岳～上高地」の、通称「表銀座コース」を2泊3日で縦走登山することになった。

白馬に生まれ育った私たちにとって、「山へ登る」というのは白馬岳など、目の前に聳える「岳」に登ることであり、「南の山へ連れてって」とは大町以南の「アルプス登山」の意味であった。

宗子は家業の「対岳館」の大黒柱で、7月中旬からお盆の頃まではお客様で忙しくなるので、それを避けて計画することにした。一方で私は、大町営林署に勤めており家業の役に立っていなくて負い目を感じていたので、勿論喜んで引き受けることにした。弟の定利は松本工業高校の2年生だったと思う。

定利と私は、週末しか日程が取れず、金曜日から2泊3日の強行登山となった。

私は、宗子の希望する「南の山」の登山は、通称表銀座コースの「燕岳～槍ヶ岳～上高地」の縦走をすることにした。

定利の授業の関係で、1日目の正午に兄妹3人で、有明駅に待ち合わせした。バスで中房温泉に到着し、登山を始めたのが午後3時少し前頃だったと思う。通常の1日コースを半日で登る強行登山である。

いよいよ登山開始、樺やブナの大木に囲まれた急な坂をあえぎながら、時間も気にしながら黙々と登る。坂道を登りきったところにある「合戦小屋」に着いたころには日暮れに近くなっていた。ここからは急な坂道はなく、道の整備もされているので焦らず進むことにした。

燕山荘まで30分ほどのところに来たときだった。前方から降りてくる人がいた。燕山荘の従業員で、「社長の赤沼敦夫さんが待っている」と伝えて下山していった。

私たちは日没寸前に燕山荘に着いたが、赤沼さんは「あまり遅いので心配していた。無事着いて良かった」と温かく迎えてくれた。赤沼さんと私は、山やスキーでのお付き合いの友人であり、とてもうれしかった。

私は昨年、営林署の仕事で燕山荘に泊まってもいたので2回目である。

燕山荘は、独特の雰囲気があった。玄関を入ると、1階のフロントや食堂の梁や柱は一部をデザイン的に露出しており、壁には有名な山岳画家の作品を展示してあるなど、山岳雑誌で見るヨーロッパの山小屋の雰囲気があった。

翌日は好天に恵まれたので、燕岳山頂を目指した。縦走路とは逆方向なので荷物をフロントに預けて、空身で往復することにした。燕岳(2763m)山頂一帯は、私の知る岳ではここだけが、大きな御影石と周りはそのごま塩のような砂礫で敷き詰められ、ハイマツとのコントラストは独特の雰囲気のある山肌である。

山荘にもどって荷物を受け取りいよいよ表銀座コースに入る。私もここからは未経験の縦走であり、気を引き締めて歩き始めることにした。

好天に恵まれ縦走路の周りには、高山植物の花が咲き乱れ、前方には大天井岳や常念岳、右奥には今日の目的地、槍ヶ岳がそびえたっている。大天井岳(2922m)の直下にある大天荘から常念岳を眺めながら、槍ヶ岳への登山道を歩き、赤岩岳(2768m)を過ぎ、東鎌尾根に取り付くまでの大下りは、足場が悪く慎重に歩く。そこからの東鎌尾根の登りは急峻で、槍ヶ岳山頂に続いている。

私たちは、今日の泊りを、東鎌尾根の途中から左折して、喜作新道を進み槍沢の上部にある殺生小屋として目指した。この喜作新道は、穂高町の獵人・小林喜作が「燕岳～大天井岳～殺生小屋」までを「喜作新道」と名付けて開拓し、殺生小屋を建てた歴史がある。頂上の槍ヶ岳山荘より歴史の古い山小屋なのである。私たちは、この由緒ある「殺生小屋」にチェックインし、荷物を預け身軽になって、槍ヶ岳山頂を目指すことにした。

槍ヶ岳山頂(3180m)には予定よりも早く着いたのでゆっくりできた。

宗子は狭い頂上の片隅に、小さなケルンを作っていたような記憶がある。夕立の気配もないので、頂上から下り、槍ヶ岳山荘付近でもくつろいで、殺生小屋に戻り宿泊した。

3日目は槍沢を下って、徳沢園でくつろぐ。ここは私の思い出深いところである。

中学2年生のとき、大阪大学山岳部にここ徳沢園に連れてきてもらい、10日間ほど、阪大山岳部のベースキャンプの留守番をした所である。

その後、3人は明神池で遊んだりして、上高地から島々まで行き、松本で定利と別れ、宗子と大町まで戻った。宗子は中澤常雄おじさんの家にお世話になり、私は営林署の寮に戻ったと記憶している。

振り返れば、兄弟妹だけの最初で最後のアルプス登山であった。今は良き思い出として、鮮明によみがえる。

北アルプス涸沢でのスキー合宿と登山

長野営林局スキー部の涸沢での第1回合宿は、1954年8月に行われた。

第1日目は、上高地から涸沢までの入山の日で、好天に恵まれて予定どおり涸沢に到着した。合宿地は、涸沢小屋から登山道を30分ほど登った、ハイマツやダケカンバ（岳樺）の生い茂った中だった。そこには深沢正二さん所有の岩小屋があり、その横にテント2張りを設営した。

わが長野営林局のメンバーは、山崎孔子、木口貞利、藤島幸造、畔上智弘、田原久、石沢義光、丸山庄司の7名。ここで私たちの6日間のサマースキー合宿がスタートした。

夕食は岩小屋の中で、深沢さん夫妻が賄ってくれ、心のこもった食事に満足して明日に備えてテントで休む。

2日目は霧がかかり視界が悪いので、テント近くの残雪で足慣らしをして翌日に備えることにする。

ところが3日目からは雨となり、スキーができる状態ではない。大型の台風が直撃したのである。しかたなくテントの中でラジオを聴いたりランプで時を過ごすも、時々強風がきてテントが飛ばされそうになる。床にも水が入ってくるのでその対応に追われる日が4日間も続いた。雨の中、食事の時だけ岩小屋を往復するだけの日が続いた。

なんと、スキーの練習ができぬまま最終日を迎え下山の日となってしまったのだ。

皮肉にも「台風一過」、素晴らしい好天である。岩小屋から眼下の涸沢のテント場を見ると、初日の時には色とりどりのテント100張りほどでにぎわっていたのに、今はテントも人影もないのにびっくり。我慢して滞在していたのは私たちだけだったのだ。

5日間もいて涸沢のロングコースを一度も滑れなかった。心が晴れぬまま、皆無言でテントを撤収し、名残り惜しみながら涸沢の雪渓を振り返り振り返り下山の途に就く。下山道は予想したように横尾本谷の橋が流失して渡れず、深沢さんの案内で、横尾本谷右岸の屏風岩沿いを藪漕ぎしながら「道無き道」を下るが、スキーがじゃまになり思う様に進まない。ようやく梓川にたどり着くと、そこには当時できたばかりの「新村橋」があり、梓川を渡り、徳沢園経由で上高地に着いた。悪天候にいじめられたサマースキー合宿であった。

二年目からは、宿泊を涸沢ヒュッテに変更した。それからの4年間は好天にも恵まれ、シーズンオフとしての十分な練習ができた。メンバーは、山崎孔子、藤島幸造、田原久、丸山庄司の4名であった。そして迎えたスキーシーズンに、長野営林局スキー部が好成績を残せたのもこの合宿の成果だと実感したのだった。

さて、振り返ると7日間のスキー合宿の合間に、半日か一日は気分転換も兼ねて登山をした。1回目は奥穂高岳を往復した。2回目は穂高小屋から北穂高岳の縦走をして涸沢に戻った。スキーの猛練習と合間の登山は気分転換にもなり、登山の素晴らしさにスキー練習とは違う魅力も感じるようになった。

そのスキー練習や登山に影響を与えてくれた人が涸沢にいた。前出の深沢正二さんである。スキーの先輩でアルピニストの深沢さんは、例の岩小屋に住んでいて私たちの宿泊する涸沢ヒュッテに毎日のように姿を現し、涸沢雪溪のスキー練習での安全ルートやたまに飛んでくる落石への対応についての心構えなどの的確なアドバイスをしてくれた。

合宿4年目のときだったと思う。涸沢岩小屋の主・深沢さんが「今年の登山は北尾根ルートの前穂高岳がいいかな。5・6の科尔から入り、前穂高岳～奥穂高岳を歩いてきたら」と薦めてくれ、私たちはそれを実行することにした。

深沢さんが北尾根ルートは難度が高いからと、細部のアドバイスをしてくれた。「両手両足を駆使しての岩登りがある。特に5・6の科尔からは岩登りが続き、ややもすると左側に進みやすいが、岩がもろいので中央を登攀するように。少し登攀すると右側にチムニー（岩の大きな割れ目）があるので探せ。そのチムニーの中を登りきれば後は急斜面ではあるが安全で心配なく登れる」とアドバイスしてくれた。チムニーとは岩の大きな割れ目のことだと初めて知った。

5・6の科尔からの岩登りは、トップが丸山、藤島、田原の順で登攀開始、同じルートが続いて進む。しかし霧の中、目標のチムニーが見つからない。岩場の浮石が気になる。3人で登攀を一時休止し呼吸を整えた後、丸山が次のステップに移ろうと踏んでいた左足を浮かしたとたんだった。スキー靴ほどの石が動いた。その石は直下にいた藤島の脇をかすめ落下していった。すごい音響であった。深沢さんが注意した、左に行き過ぎたのであった。

この状況の中、トップの丸山は責任を感じ、チムニーの場所を探しに行動を起こす。岩場を右往左往していると、チムニーは現在地よりも右寄りの少

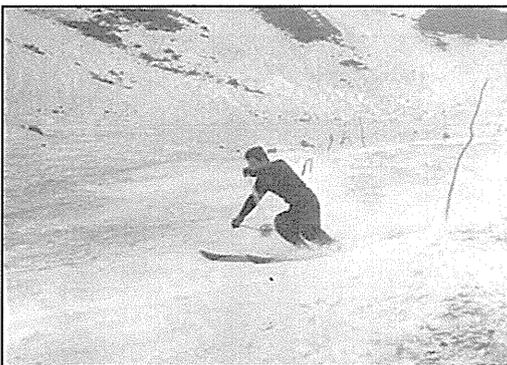
し上にあった。3人がチムニーの下部にそろったときの安堵感は今も忘れられない。

5・6のコルからの岩登りは緊張もしたが、1峰の前穂高岳の頂上に立ち眼下の岳沢と上高地を眺め、3人で喜びを分かち合った。

まだ日は高いので西穂高岳へのルートにある、「馬の背からジャンダルム」まで足を延ばした。その後、奥穂高岳に戻り、ザイテングラート経由で涸沢に無事帰った。深沢さんに「チムニー探し」の報告をすると、「やっぱりそうだったか」と言いながら、ほっとした深沢さんの顔を今も思い出す。



落石を避けて岩陰で
スキーを履いてスタート



丸山庄司

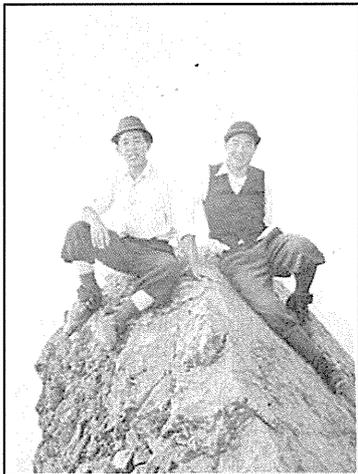
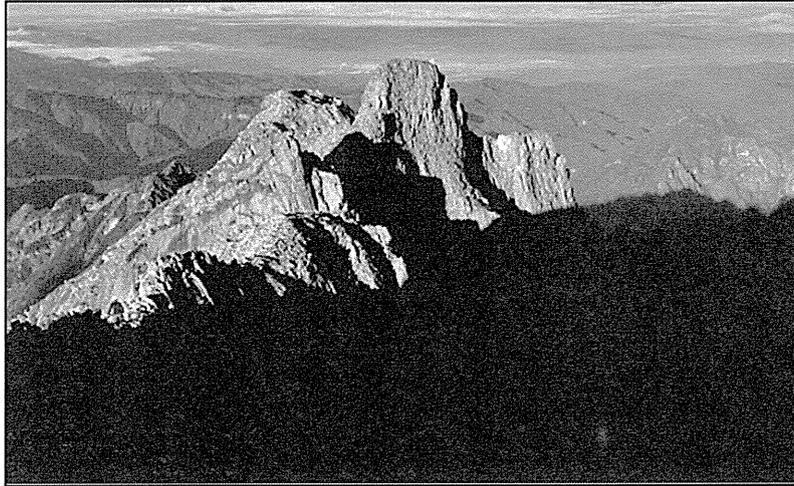


藤島幸造



1953年(S28)8月15日～23日
林友スキー夏合宿：北アルプス涸沢テント内

ジャンダルム



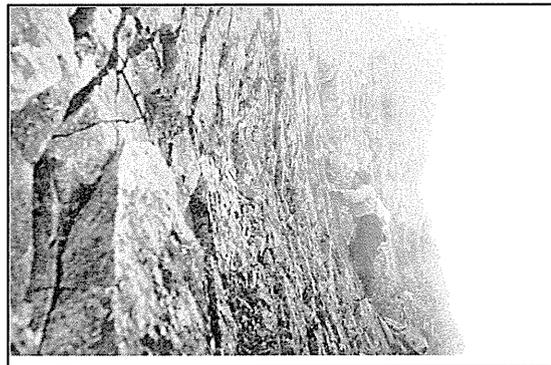
ジャンダルムにて、田原久・藤島幸造



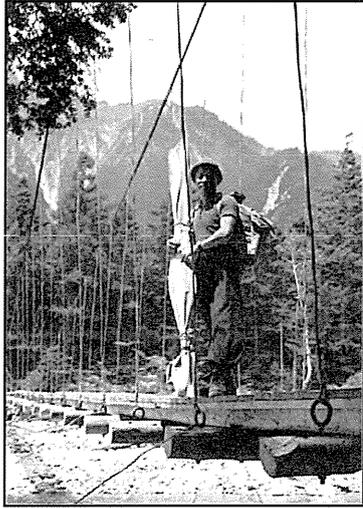
左から：石沢・藤島・丸山・田原・畔上



チムニーを攀じ登る



5・6の科尔上部でチムニーを探す：丸山



横尾本谷



下山：上高地、ウェストン碑前
左：木口・石沢・山崎・藤島・田原・畔上・丸山



左から、山崎・カメラマン・藤島・丸山・田原・山口 前：小林銀一さん(ヒュッテオーナー)



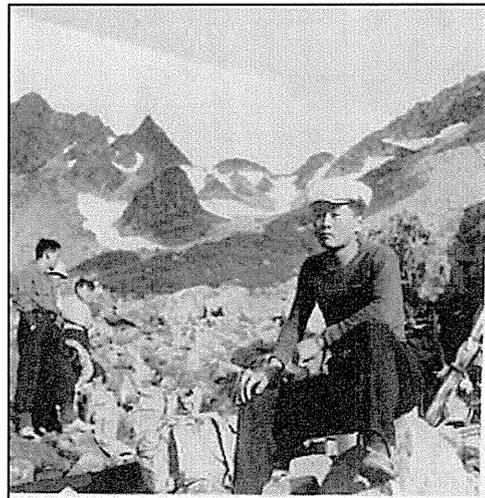
左から：山崎・藤島・丸山・田原

第1回涸沢スキー合宿

宿泊はテント 食事は岩小屋にて(深沢夫妻の料理で)



徳沢園：丸山・田原



涸沢にて

長野営林局スキー部第1回涸沢合宿は、前記のように、入山と下山の時だけ好天、後は悪天候、6日で2時間だけのスキー、これだけ苦勞して。……しかし、自然の厳しさを知るといふ貴重な経験もさせてもらった。

岩小屋であれだけ待った「肉」は上高地の保養所にあり、下山したとき、もったいないと料理してくれたが、とても食べられるものではなかった。

昭和29年(1954年)7月

後立山縦走

(唐松岳～鹿島槍ヶ岳～針ノ木岳～七倉沢～葛温泉)

長野営林局スキー部は解散となったが、山崎孔子、宮島久、丸山庄司の3名は営林署に勤めながら選手は続けていた。3人は1959年8月14日、白馬大雪渓でスキー合宿を計画して白馬の我が家に集まった。ところが前夜、白馬岳の白馬山荘が火災となり第2新館を残して全焼し大雪渓周辺は大混乱が予想され、スキー合宿を行う状況ではなくなってしまった。3人はその日に計画を変更して、「唐松岳から後立山縦走」の登山にした。

当日の午後4時、八方尾根のゴンドラの最終便に乗車し八方尾根を登り、唐松岳に着いたときはすでに日没となっていた。

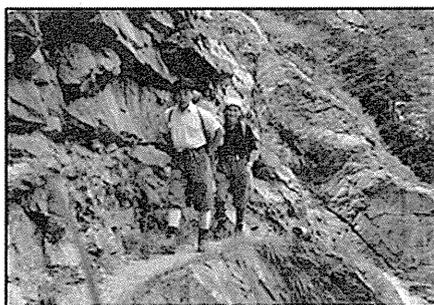
翌日15日、唐松小屋を朝早く出発、好天に恵まれ携帯ラジオから流れる甲子園の高校野球の実況を聞きながら「急がず休まず」の縦走は順調に続いた。はじめ「冷池小屋泊り」の予定だったが、天候も安定していたので針ノ木峠まで伸ばすことにした。針ノ木小屋に着いたのは日没近かった。11時間ほど歩き続けたことになる。

翌16日、山崎は針ノ木雪渓から大沢小屋経由で下山。田原・丸山は船窪小屋経由で葛温泉への縦走と変更した。山崎を見送ったあと、田原・丸山は蓮華岳に向かう。山頂で水の補給を忘れたことに気づく。晴天の下、船窪小屋まで水分の補給なしではつらいので、二人は水を求めて七倉沢を下降するルートにコースを変更した。無謀にも水を求めて、船窪小屋経由より近い「未知のルート」をたどることにしたのである。今記憶をたどり思い返せば、水分補給だけではなく「未知のルート」に魅かれたのかもしれない。さて、稜線から七倉沢に続く斜面は急峻なうえに、滑りやすい草付きの斜面が続いていた。灌木帯に入り、さらに下降すると滝で水の音が聞こえ、ようやく水場に着いた。補給した水の味は忘れられない。

急峻な沢に大岩を組み合わせてできたような10mほどの滝の連続で、ザイル無しでの下降は危険なので、滝を避けて何回もブッシュにつかまり、遠巻きしながら下降し再び沢に戻る。何回遠巻きしては滝の下に戻ったのだろうか。巨岩でできた滝の連続をつかず離れずに行けば、最短距離で必ず七倉の森林鉄道にたどり着くことを信じて下降した。

線路にたどり着いたときは安堵した。時刻は思い出せないが、まだ日は高かった。飲み水の解決もでき、未知の沢下り、苦勞したが思い出多い沢下りとなった。八方尾根から入り、唐松小屋（泊）～鹿島槍ヶ岳～冷池小

屋～針ノ木岳（針ノ木小屋泊）～七倉沢～葛温泉、2泊3日の行程は、かなりハードに思われるかも知れないが若い3人にはゆっくりした山歩きであった。何よりも好天に恵まれたことであった。



後立山縦走：田原・丸山（山崎写す）

メンバー	飯山営林署	山崎孔子（飯山体協）
	大町営林署	田原久（大町スキークラブ）
	大町営林署	丸山庄司（白馬体協）

長野営林局のスキー仲間と裏銀座縦走

藤島幸造（アルペン競技・世界選手権出場）、田原久（現姓宮島）、丸山庄司の3名は長野営林局スキー部が解散しても、夏になると毎年のように登山をした。3人は5年間続けられた涸沢のスキー合宿の合間を縫って穂高連峰の各峰に登った。

その後も、白馬岳～不帰ノ険～唐松岳縦走や、白馬岳～白馬大池～蓮華温泉などこのメンバーで歩いた。今思い起こせば、「今度はどの山に行く？」と藤島さんに言われたのがキッカケだった。今回の3泊4日の裏銀座縦走には、同僚の江遠要甫（複合競技・オリンピック出場）も加わった。さらに、藤島、江遠の友人女性1名と大町営林署の女性22名が加わり総勢7名のパーティとなった。しかし、この「裏銀座縦走」は悪天候に見舞われたりして、ハプニングの多い、未だに記憶に残る山行となった。藤島他、遠来の友は、前夜大町営林署の寮に宿泊させてもらった。

第1日目は好天に恵まれ、一行は大町営林署を出発し、七倉貯木場を経由して濁沢の尾根に取り付く。うわさに聞く急な登りに喘ぎながらも、予定通り烏帽子岳の頂上に立ち、この日は烏帽子小屋に泊まる。

第2日目は、早朝6時出発。北アルプス一帯は好天ながらも遠く富士山方面の朝焼けが気になる。天候の崩れる可能性を感じ、野口五郎岳や真砂岳の稜線を歩く登山道は天候の崩れる前に通過しようと田原と打合せする。しかし10時頃、野口五郎岳付近に来ると、霧が巻いてきて風も出てきた。案の定30分ほどして雨がポツリポツリと当たるようになった。予想より早い天候の急変である。次第に雨と風が強まるばかりである。そんな中で、幸いに我がパーティは、稜線から外れて水晶小屋跡に近づいていた。ここからは三俣蓮華岳の稜線ではなく平地に近い下の道を選んだ。風は稜線より弱いが土砂降りの雨となった。

私は高校のとき黒部川を遡りこの道を歩いているが、1時間ほどで三俣蓮華小屋のはずである。雨と風の中を私たちとは逆に烏帽子小屋に向かうパーティとすれ違う。風雨の強い尾根道が心配になった。

小屋まで30分ほどのところで、東京薬大パーティがテントを張っていた。声をかけるとガイドの大谷武文さん（望翠荘）だった。「もう少しだ、頑張れ」と励まされる。12時ころだったが昼食はあきらめ、ビスケットをほおぼりながら歩き、三俣蓮華小屋に到着した。しかし、ホッと小屋でくろいだときだった。木曾福島から来た女性が腹痛を起こし苦し

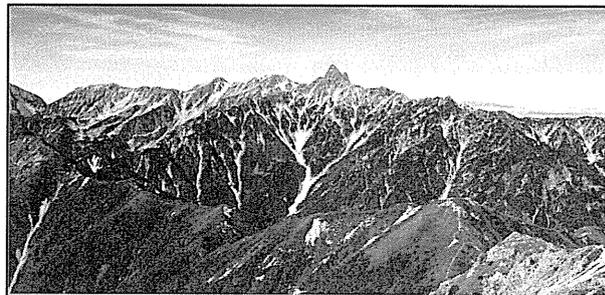
がる。同宿者に医師がいたので診ていただくと、「急性盲腸炎では」という。大変なことになった。三俣蓮華小屋からは、どこかに1泊しないと下界には帰れない場所である。私は、東京薬大のテントを目指して雨の中を走った。事情を話すと、「この薬を飲ましてみろ」と錠剤をいただいた。再び風雨の中、三俣蓮華小屋に飛び帰った。本人は苦しみながらも、「大丈夫だから」というが、私たちに気を使っているのか真意は分からない。いただいてきた薬を無理に飲ませた。そして、冷えた体を温めて様子を見ることにした。夕食後尋ねると、「痛みが和らいだので大丈夫」と聞き、ホッとしながらようやく就寝する。

3日目、原因はわからないが薬が効いたのか、腹痛もおさまったようで笑顔であいさつされ安堵し、本当に良かったと思った。昨日の風雨は嘘のようで、曇天の静かな朝を迎える。東の方に晴れ間も見える空に歓声を上げ、午前6時に出発。昨日と違い会話も弾み、双六小屋でゆっくり休憩して、予定通りに槍ヶ岳山荘を目指し12時過ぎに出発した。山荘で受付を済ませるも、相変わらず槍ヶ岳山頂は濃霧の中である。午後3時となったころ霧の中、頂上を目指すこととする。30分ほどで、全員で槍ヶ岳頂上(3180m)に立った。昨日、悪天候に痛めつけられたあとだけに、視界はないが山頂の感激は大きかったようだ。

4日目は快晴で、高山植物の咲き乱れる槍沢を下る。のんびりと横尾から徳沢園、明神池に立ち寄り上高地に到着した。悪天候と気疲れ続きの、3泊4日の裏銀座縦走は無事終わりほっとする。

余談であるが、腹痛を起こした女性は、1泊目の大町から大便がでず、3日目に腹痛になったのだという。医師によると環境が変わったのが便秘の原因とのこと。帰宅してからも正常に戻るまで1週間もかかったとか。とんだ笑い話であったが本当に良かった。

翌日、大町営林署に戻ったら、同僚たちが悪天候なので心配してくれていた。また、私たちとすれ違ったパーティが稜線で遭難(死亡)し、遭難救助隊の出動要請が出て大騒ぎだったらしい。



槍ヶ岳・北鎌尾根の登攀

1962年（昭和37年）9月上旬だった。遠山鎮彰、田原久（宮島）、丸山庄司のメンバーで槍ヶ岳の北鎌尾根を登攀した。大町営林署に勤めていたときだったので、休日を利用して1泊2日の強行日程だったが天候にも恵まれた。

1日目は、葛温泉の奥にある七倉貯木場から東沢の終点まで、大町営林署の森林鉄道に乗せてもらい、湯股温泉を経て右岸の天井沢をさかのぼり、夕方に無人の「日大小屋」にたどり着いた。

この山行のきっかけは、大町営林署が日大小屋の補修に木材の払い下げをしたことであった。7月下旬に、丸山がその引き渡し業務で登ったとき、目の前にそびえる北鎌尾根の雄大さと、その尾根につながる独標へのルートを見て、いつか登ってみたいと思ったことから始まった。8月下旬のある日、大町営林署の庁内で昼休みの時、遠山・田原の二人に話すと、興味を示し3人で登ろうと即決したのである。

日大小屋から見る北鎌沢は急峻だったが、下部は石とイタドリのゆるやかな沢状になっていて、その上部は草付きで「独標」手前につながっていた。この時期は水も流れていなくて歩きやすい感じである。周りは下部が樹木、上部は灌木に覆われている。その灌木は雪に押されて急斜面を下方に伸び、とても登れる状況ではない。やはり、人が入れるのは唯一北鎌沢だけであると思われた。私たちは日大小屋で翌日の分まで食料を準備した。たくさんのおにぎりとおコッヘルで味噌汁を作り、早めの夕食とする。3人には広すぎる小屋で、寝袋にもぐりゆっくり休んで、早朝起床し出発した。

北鎌沢は予想したとおり、急峻だが歩きやすく順調に独標の下にたどり着いた。独標は大きな岩山で、予想はしていたがここの登攀はキスリングを背負っては危険な感じである。私たちは身軽になれば登攀できる。ザイルがあれば後でキスリングを引き上げられるのにと、ザイルを持ってこなかったことを反省しながらも、ルート探しをしているときだった。

遠山が、「千丈沢側に足のかかる岩棚が横に伸びている。横切って渡れるかもしれない」という。トップに遠山が挑戦する。絶壁の断崖をカニの横這いで進む。足つま先と手以外は空中である。田原と丸山はハラハラドキドキの中でただ見つめるだけだった。遠山が無事渡り切った。続いて田

原、丸山の順でカニの横這いが成功、3人でほっとした記憶がある。

後日分かったことだが、写真家でもある塚本閑治さんの「写真集・日本の山々」の中に

「・・・独標の岩峰は是を右に巻いて直登を避ける事も出来る・・・」とあった。

こうして、3人が無事にしかも簡単に乗り切ることができた。

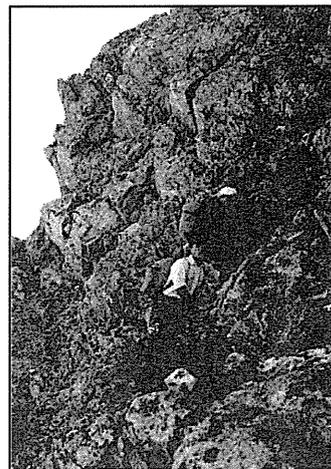
独標から上も急峻な岩場が続くが浮石は少ない。以前に登攀した、前穂高岳の5・6のコルから前穂高岳山頂までの岩場より安定していた。3人で縦に連なって黙々と両手と両足を駆使してひたすら登る。所々にハイマツがあるが小さい。3人は声をかけ合いながら、確認し合い、両手両足を駆使しながらよじ登っていく。途中から霧が出てきて視界が悪くなってきたが、岩登りに影響はない。急な岩壁はどこまで続くのだろうと思いつつ登攀を続ける。独標を過ぎてからどのくらいの時間がたったのだろうか、手を使わずに足が前に出た。

トップの田原が、「祠がある。頂上だ」と叫んだ。嬉しかった。

よく見ると狭い頂上には、登山者が3名ほどいたが、霧の中から予想もしない変なところからいきなり人が出てきたので驚いていた。

こうして私たちは好天にも恵まれ、北鎌尾根を攀じ登り無事頂上に立つことができた。3人で喜び合い、頂上で少し休憩の後、槍ヶ岳山荘に下りた。

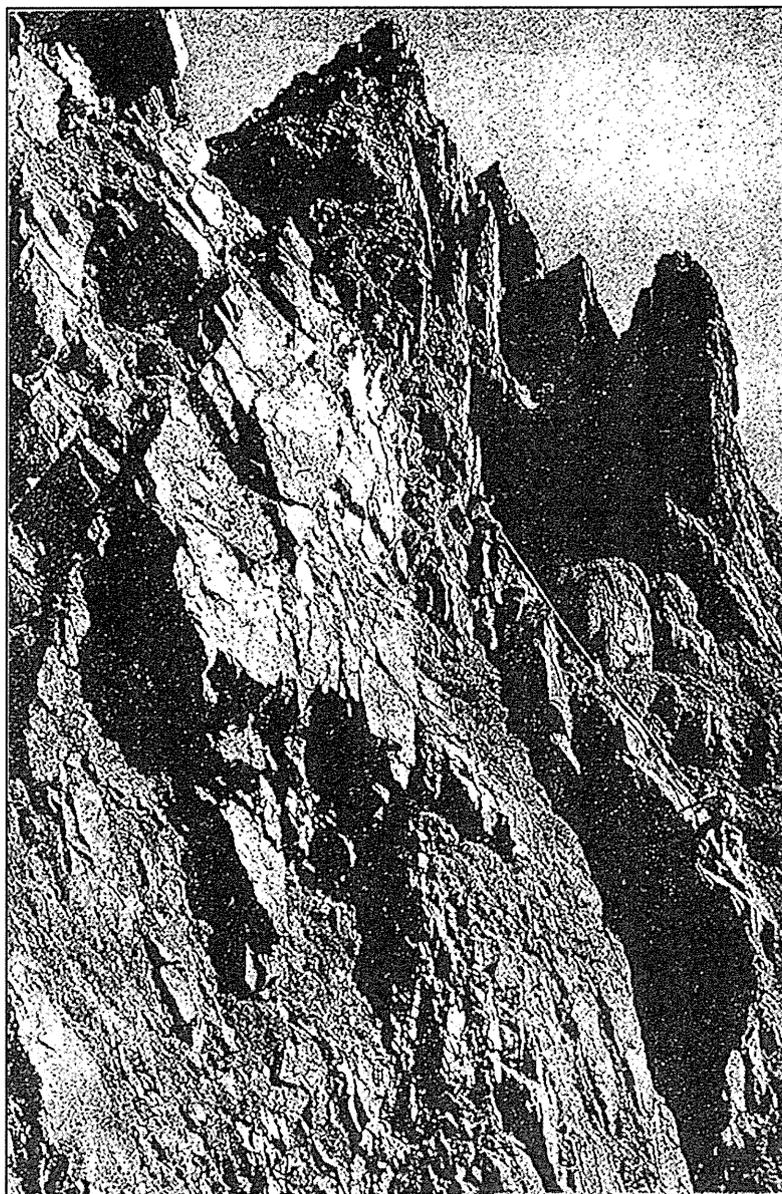
下山は、裏銀座コースの西鎌尾根をたどり、三俣小屋に立ち寄った後、伊藤新道に入り湯股温泉に下りた。東沢からは再び森林鉄道にお世話になって、七倉の貯木場に到着した。翌日は何事もなかったような顔をして、勤め先の大町営林署に顔を出した。



勤めの合間に行く、危険を伴った慌ただしい山行きは褒められたことではないと反省した覚えがある。

北鎌尾根登攀：田原（上）、丸山（下）

北鎌尾根



親友と風吹大池～白馬岳～唐松岳縦走

特に親しく、しかも同郷で「山とスキーが趣味で、同じ職場」という共通する20代の頃からの友人、遠山鎮彰（白馬村神城）、宮島久（旧姓田原・小谷村池原）との3人の思い出をたどる。2人は大町南高校、私は白馬高校を卒業し、同じ年に大町営林署に採用された同期である。中学時代から遠山はクロスカントリー、田原と私はアルペンの選手だった。

しかし営林署ではスキーよりアルプス登山が多かった。主として遭難救助で大町営林署班に所属し活動した。また、3人のプライベート登山もした。

今も強烈に残っているのが、槍ヶ岳・北鎌尾根の登攀である。この登山記は、別の項で詳細に記録したので省略する。

当時、3人が26歳のころで結婚も考えていた時であり、大町営林署の寮で一杯飲みながら将来を語り合ったものだ。

その年の春、私は永子との結納が済んだばかりだった。田原は大町の宮島家から養子にと勧められ悩んでいた。遠山には、同じ職場の川上謹子さんがいたが、彼女の母親の反対があって頓挫していた。そのような状況の夏だった。3人で相談し6人で登山をしようとなったのである。

テントで2泊3日のコース、風吹大池～白馬岳～不帰岳～唐松岳の縦走にした。1日目は天狗原にキャンプを予定した。営林署のトラックで、北小谷の借馬から林道の終点まで行き、登山を開始した。

風吹大池は、神秘的ともいえる、静かなたたずまいで独特の雰囲気があった。女性3名は初対面であったが、なんと紹介したか忘れた。事情は理解して参加しているので、我々3人に黙々とついてきたという記憶がある。

登山は順調で、風吹大池からブナ林や灌木の中を過ぎ、第1日目のキャンプ予定地天狗原についた。テント2張りで男女別に、それぞれ3人で休んだ。

2日目も好天に恵まれた。昨日と違い女性同士の会話がよく聞かれるようになり、我々男性はほっとした。白馬大池を右下に見ながら、小蓮華岳の稜線を登る。予定どおり白馬岳山頂に立つことができた。女性陣も思いのほか健脚でほっとする。白馬頂上小屋の近くのテント場についたら、大町営林署で1年先輩だった松沢博次さんが高山植物の巡視員でおられて、私たちの事情を知り女性3人を励ましてくれていた。

3日目は、杓子岳、白馬槍ヶ岳、天狗の大下り、難所の不帰ノ嶮も順調に通過し唐松小屋で大休止のあと八方尾根を下り、無事登山を終えた。

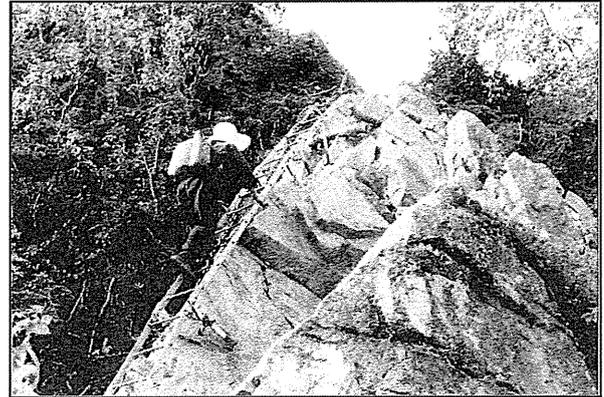
この登山がキッカケとなり、3組が相次いで結婚式を挙げることができたのだった。

1961年(昭和36年)

8月11日から2泊3日



左から:丸山、宮島夫人、遠山夫人、永子、
後:宮島久



不帰ノ嶮:梯子を登る永子

遠山写す

※ 余談であるが、私と永子の縁組は本人が知らないところで進められていた。

後でわかったことだが、父・与兵衛が仕掛け人で、親戚の森上・入田旅館のおじさんと相談し、おじさんが行動していたのだった。

父は、縁談が決まってから「庄司、それでいいな」と一言。私もすべてをお任せだった。そのようなことなので、結納の日も私は全日本スキー選手権大会で志賀高原にいた。翌日、大会の応援に来た、義兄となる郷津勝と、伊藤光正(藤屋)が教えてくれた。

私も「よろしく」と答えたが、気心の知れたスキー仲間なので会話はそんなものだった。

二人で表銀座から北穂高岳の縦走

1961年（昭和36年）7月、永子と二人で2泊3日の登山をした。

白馬駅を早朝の一番列車に乗り有明駅で下車。バスに揺られて中房温泉へ。いよいよ登山開始、燕岳へ向かう。このコースは営林署の仕事で燕山荘に泊まっているし、妹弟の宗子と定利とも登っているのだから3回目となる。燕山荘の赤沼敦夫さんに会い、小休止ののち表銀座コースを休まずのんびりと歩く。

1日目の宿泊は、山岳ガイドの義父・郷津長平がアドバイスをしてくれたこともあって大天井山荘を予定した。通常だと燕山荘泊りだが、永子は結婚する前は、夏、梅池の成城学園ヒュッテの小屋番で働いたこともあり、温泉に入りたくて一人で成城ヒュッテから、白馬大池～蓮華温泉を日帰りで行ってきたとか。足には自信があることを義父も知っていたのだ。天候も安定していたので、初めての縦走だが不安もなく、順調に大天井ヒュッテに着く。

2日目も好天に恵まれ、急な東鎌尾根を登り、正午前に槍ヶ岳山頂に立つことができた。この後、槍沢を下りて上高地泊りを予定していたが、天候も安定しているので、急遽変更して北穂高岳を目指すことにした。

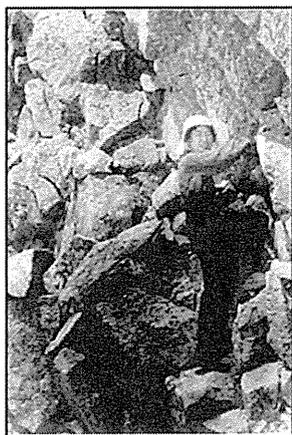
私は高校生のとき、阪大山岳部に同行させてもらい、針ノ木峠から黒部湖に下り黒部川を遡り、東沢から裏銀座コースに出て槍ヶ岳を経て大キレットから横尾本谷を下降したことがあるので、大キレットは2回目である。

私たちは、大キレットまで順調に来た。あとは北穂高岳を目指していよいよ岩登りをはじめ。白ペンキの矢印があるのでルートに不安はない。

しかし、登攀をはじめると、永子は岩登りに緊張したのか、足にけいれんを起こし歩けないという。午後4時ごろだったと思うが、日暮れまでには時間は十分にあるので、岩棚に休ませ、足のマッサージをして緊張をほぐすことにした。

思いのほか回復が早く、登れそうだというので再び登攀開始、あとはゆっくりだがなんとか登れて稜線に出る。目の前に懐かしの「北穂高小屋」があってホットした。小屋では義父・長平の話をする、小山さんが喜び歓待してくれた。私は、涸沢でのスキー合宿に6回も来ていて登山もしていた。涸沢からザイテングラートを登り、奥穂高小屋から涸沢岳、北穂高岳を縦走しているので、北穂高小屋にはきたことがある。

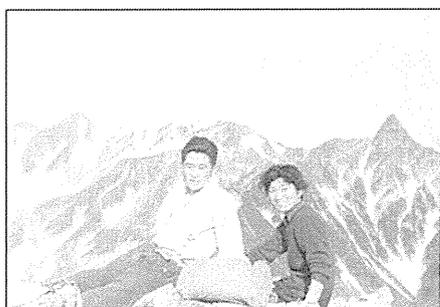
最終日も好天に恵まれ涸沢に降りた。涸沢ヒュッテの小林銀一さんにあいさつし、通いなれた道をたどり、横尾本谷を渡って、徳沢園で大休憩した。休憩のあと、徳沢園を出て、明神池に寄り、上高地に到着。2泊3日の強行登山は無事終わり白馬に戻った。



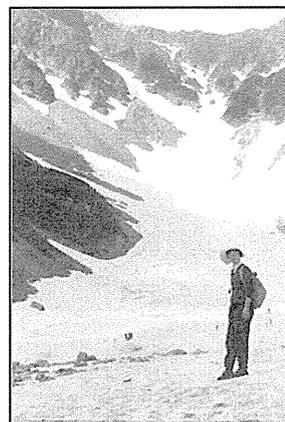
大キレットの登り



北穂高岳山頂にたどり着く



北穂高岳山頂にて



涸沢にて

***「徳沢園」といえば、中学2年のとき、10日間ほど滞在している。大阪大学山岳部が奥又白一帯の岩壁に挑戦していて、徳沢園の前の牧場（キャンプ場）がベースキャンプとなっていた。父が頼んでくれたらしいが、私をテントキーパーで連れて行ってくれたのだ。

留守番の私は、徳沢園の喜藤次おじさん（現経営者：上条敏昭さんの祖父）に可愛がられて、毎日訪ねて遊んでいた。また、一人で大滝山に登ったりした。阪大の家田千尋さん、加藤幹太さんに奥穂高岳にも連れて行ってもらった記憶がある。

振り返ると、私の山好きの原点は、阪大山岳部と父与兵衛の影響が大きいと今も思っている。***

書道家・伊藤東海先生と鹿島槍ヶ岳に登る

私が、大町営林署に勤めていたころ、大阪にお住いの書道家・伊藤東海先生が、大町営林署の三井呂旬朗さんや大蔵勝さんたちの案内で、高瀬川入りの湯又温泉の散策や70歳に近いのに燕岳などの登山に来訪されていた。

先生の書である、「住友銀行」の書がそのまま住友銀行のシンボルマークになっていることを知った私たちの間では、「山好きである有名な書道家・伊藤東海先生」なのだと話題になっていた。

1963年（昭和38年）7月、大蔵さんから、「先生が鹿島槍ヶ岳への登山を希望しているので一緒に登らないか」と誘われ、私と遠山鎮彰が同行することになった。初日は扇沢から入り爺ヶ岳の冷池小屋に泊まり、2日目は鹿島槍ヶ岳山頂に立ち冷池小屋に戻り宿泊、翌日鹿島部落に下山する2泊3日のコースとした。

天候にも恵まれ、2日目に鹿島槍ヶ岳に登頂し、宿泊地の冷池小屋に戻ったときは一安心した。そのとき、冷池小屋に連絡が入り、同行の男性の家族が急病とのことで、急きょ下山されることになり、日没迫る中遠山鎮彰が信濃大町駅まで同行した。

書家である先生は、大町に来られるときも必ず「筆と墨汁」を持ってこられていたので、私たちは登頂記念に、冷池小屋の看板を書いてもらおうと話し合っていた。事前に、冷池小屋の経営者の柏原さんに話すと、快く「看板の板」を準備してくれることになった。しかし、「先生はご高齢でしかも鹿島槍ヶ岳に登った後なので無理かもしれないが」と話しておいたが、冷池小屋でくつろぎの後、大蔵さんが恐る恐る「板」の話をする、先生は「いいですよ」の一言で快諾されほっとした。

先生はご持参の筆と墨汁をそろえて、私たちの目の前で「冷池小屋」と書かれた。標高2490mの冷池小屋、山小屋では日本の書道界で初めてのことだろうと、私たちはささやき興奮した。

書き終えた先生は、板の側面に「東海」の朱印を押されたあと、柏原さんに渡されたのを鮮明に覚えている。

翌日は、赤岩尾根の急峻な登山道を下山し、鹿島部落の宮坂源治さん宅で、顔や手を洗い、お茶をいただきくつろいで大町に戻った。思い出に残る楽しい登山だった。

宮坂家は、大町営林署の鹿島山国有林の窓口として、いつも暖かく迎えてくれる家族である。

その後も、東海先生とは白馬大雪溪から白馬岳～白馬鑓ヶ岳～不帰ノ険～唐松岳縦走など案内し、お付き合いいただいた。

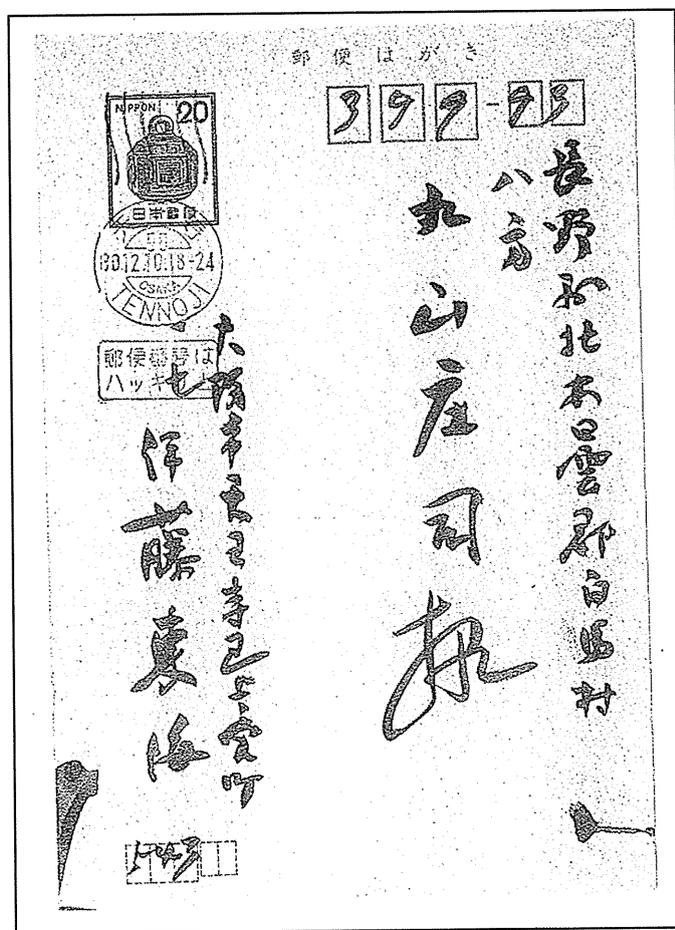
晩年、八方尾根や梅池自然園などを散策に来訪された。あいにく、天候が悪く、わが家の対岳館に滞在されたときだった。私が同行の若い書道のお弟子さんたちの前で、例の板を二枚差し出してお願いすると、大きい板に「対岳館」と書かれて朱印を押してくださった。

そして、もう一枚にも何か一筆とお願いすると、先生は「晴天独歩」と書かれ弟子たちの顔を見て、意味ありげに「にやっ」とされた。

私が、その意味をお尋ねすると

「今度来るときは一人で来るよ」と言われ、みんなで大爆笑となった。

わが家では、その二枚の「書」と、そのときの先生の写真を現在も大事に保管している。



公務出張で燕岳に登る

小学校の教科書に、「燕岳に登る」が載っていた記憶がありその名は知っていたが登山する機会がなかった。私が初めて「燕岳」に登ったのは25歳のころだった。当時大町営林署に勤めていて燕岳へのお出張を命じられた。

山頂近くにある山小屋の経営者・赤沼敦夫さんが、高瀬溪谷側の沢から燕山荘まで引水計画をした。高低差300m、全長1kmに及ぶ距離だった。当時の山小屋で、この大規模のポンプアップは最初だったと思う。

場所が国有林なので、営林署の許可が当然必要となる。私は署長のお出張命令を受けて業務として登山することになった。営林署では国有林の管理があるので当たり前のことでもあった。ただ女性職員にはその機会はなかった。営林署という環境なので、登山好きな方が多く、女性職員には羨望されていた。

私は、燕岳はポピュラーな山と聞いていたので、「上司の休暇許可が出れば2~3人ならいい」と話しておいた。大町営林署には女性が8名ほどいたと思うが2名が同行することになった。現在だと「役所が公私混同」だと非難されるだろうが、当時営林署では容認する雰囲気があった。もちろん2名は休暇を取ったと思う。

1日目は大糸線有明駅で下車し、バスで中房温泉まで行き、燕岳の登山はスタートした。しかし、残念ながら雨である。梅や樅の巨木の急な坂道を喘ぎながら、黙々と登ると合戦小屋に着いた。二人の女性はさすがに営林署勤務だけあって歩くコツを知っていた。ここからは巨木がなくなり、ハイマツ帯で道も穏やかになった。雨の中、5時間ほどで燕山荘に着きホッとす。

私とはスキーの知人でもある社長の赤沼さんが到着を待っていた。女性二人には休んでもらい、大分雨もおさまった感じなので、赤沼さんと現場に出かけた。少し問題点もあったが、営林署に帰って処理することにし山での業務をすべてすませた。

燕山荘は他の山小屋と比較すると、内部はすべて木で覆わず、木材を活かしセンス良く柱など露出してある。そして有名な山岳画家の絵を飾るなど、落ち着いた雰囲気があり、山岳雑誌で見るヨーロッパの山小屋を思い出した。

私たちは、この燕山荘の雰囲気に感動し、その上においしい食事に満足した。

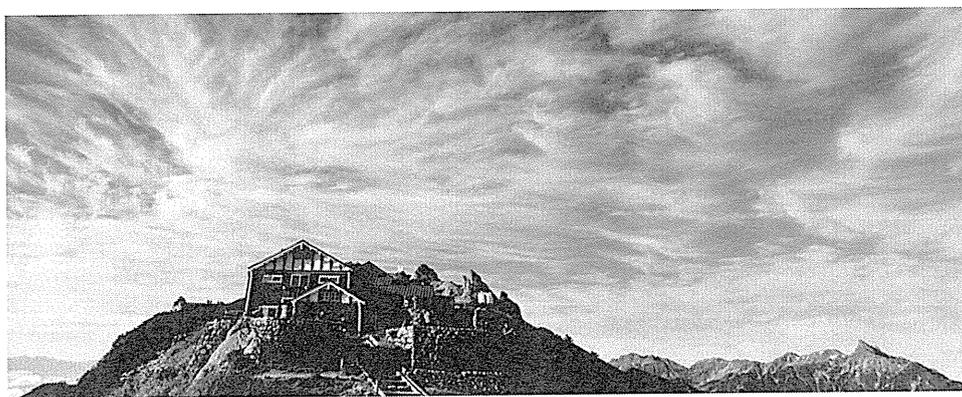
大町営林署としての業務を終えた翌日は、昨日の悪天候が嘘のように晴天に恵まれた。心も新たに3人で燕岳の山頂に立った。山頂一帯は白い花崗岩と、白っぽい砂れきが山肌を埋め、ハイマツとのコントラストが印象に残った。私の知る限り、北アルプスのどこにも、このような白一色の岩石帯に出会ったことはなく、初めての体験だった。

表銀座の縦走路に続く、遠くの槍ヶ岳を眺めたりしたあと、下山の道に入った。周りの高山植物が咲き乱れる登山道を、のんびりと辿ると東沢乗越の尾根に着いた。

右を下れば昨日の中房温泉、そのまま進めば餓鬼岳で松川村に通じるがもう一泊必要である。私たちは予定どおり、左の東沢を下り葛温泉経由で帰ることにした。東沢は高瀬川の支流で、出会い付近に大町営林署の木材を伐採し搬出するための現地事務所がある。先輩や同僚に会い話が弾み休憩した。ここから七倉貯木場まで木材搬出の森林鉄道がある。事務所の同僚が、モーターカーで七倉貯木場まで送ってくれて有難かった。

七倉の事務所にも同僚がいて懐かしく話が弾み。ここでも3人でお茶をいただき葛温泉から大町営林署に戻った。

燕山荘での未処理のことは上司に報告し、所長の許可を得てすべてが解決した。



燕山荘ホームページより

白馬の雪渓で初めてのスキー合宿

1950年ころの8月の夏休み、白馬山頂近くの旭岳の雪渓で4泊5日のスキー選手の合宿が行われた。頂上小屋泊りで、対象は北城村（現白馬村）の中高生30名ほどで、私も参加した。指導してくれたのは横沢方夫さん（横沢医院）と平林堅さんだった。夏のスキー練習は白馬で初めての企画で、新風を与えてくれ選手には大きな自信となった。

下山は、葱平からスキーを付け、大雪渓を登山者を避けながら白馬尻まで滑り降りたが、何人かはあの狭くて急斜面の小雪渓を滑り降りた。これが契機となり、オフシーズンに雪渓でスキートレーニングをするようになった。白馬大雪渓の下部が候補地となった。しかし、落石の心配があった。登山者と違い、私たちは同じ場所で何時間も雪渓にいたので、落石の危険と隣り合わせで常に気が抜けなかった。

その後、落石の少ない白馬沢で長野県スキー連盟の強化合宿が行われた。さらに、針ノ木雪渓が、落石の危険が少ないことが分かり定着した。また、乗鞍岳の雪渓で、SAJ公認の選抜スキー競技会が開催されるなど、雪渓での合宿が盛んになった。

一方で、一般のスキーヤーも雪渓に来るようになり、雪渓脇の高山植物帯で休憩するなど問題になった。環境庁は自然保護指導員を増員し、保護をすすめた。私も自然保護指導員に任命され、白馬岳一帯の自然保護につとめた。

その後、ニュージーランドやヨーロッパの雪渓など海外での練習に変わっていったのである。

高校生の白馬旭岳雪渓でのスキー合宿



後列左から2人目・平林堅一コーチ、前列左端：横沢方夫コーチ

長野県スキー連盟主催
白馬沢雪渓合宿



指導者から説明を受ける



針ノ木大雪溪の落石調査

1960年6月、田原久(現姓宮島)さんと二人で針ノ木大雪溪に入った。目的は長野県スキー連盟アルペン強化合宿の好適地か否かの調査であった。1950年代の頃から、オフシーズンは白馬岳山頂近くの旭岳の雪溪、白馬大雪溪の下部、白馬沢、穂高連峰の涸沢雪溪などで毎年行われていた。

針ノ木大雪溪もロングコースがとれるし、適地ではないかと二人で話題になっていた。調査の課題は、「落石の心配と、山小屋(大沢小屋)が合宿に利用可能か」が主であり二人で休日を利用して調査登山することにした。

大沢小屋を過ぎ、針ノ木雪溪の取りつきから上部を見ると、雪溪の幅も広く、全長2kmはあろうかと思われた。その雪溪から上部は灌木帯が続き、がれきや高山植物帯となり針ノ木岳山頂につながっている。落石の心配は少ないと判断した。

しかし、右岸蓮華岳からの急な岸壁の落石が気になった。幸いなことにこの針ノ木雪溪は幅が広いので、蓮華岳の岸壁から離れて雪溪の右側にポールセットすれば安全だと分析した。それをもとに、雪溪を登りさらに上部から観察検討することにした。雪溪を登り、上部の大岩(左手)のところから少し上がったところに来ると、雪溪は急角度で左折し、さらに急な斜面が針ノ木峠(針ノ木小屋)へ続いている。しかし、コースのスタート地点は、雪溪の左折地点までで充分である。

その地点で、私たちはスキー板とリュックサックを雪溪の横に置き、灌木帯をよじ登り針ノ木岳の山頂に向かって、がれきと高山植物地帯まで直登した。そしてハイマツやナナカマド、岳樺の灌木が生い茂った状況を見て、「落石はないだろうし、あったとしても雪溪までは来ない」と判断した。

二人で安全性を確認できたことに安堵した。

時計はすでに夕方5時を回っていたので予定どおり野宿することにした。ハイマツの下にスキー板を並べ寝袋に潜り込んでのビバークである。翌日は針ノ木峠の小屋まで登り、ポールセットを想定しながら一気に雪溪尻まで滑り降りた。

次は大沢小屋の借用交渉だけとなった。後日、二人で「経営者の百瀬美江さん」を訪ね小屋の使用をお願いしたら、快く了解してくれた。

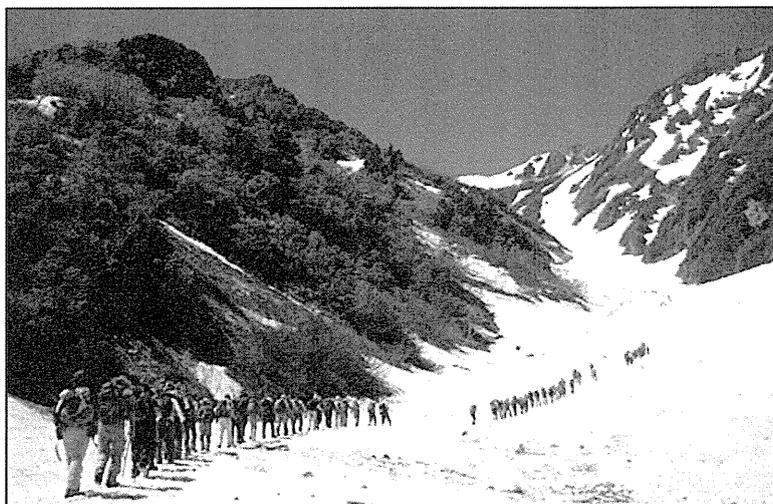
後日、片桐匡さん、関金三郎さんをはじめアルペン仲間に、針ノ木大雪溪の状況を報告すると、喜び了解してくれた。

こうして、翌年の6月から「針ノ木合宿」を行うことになったのである。5泊6日の自炊方式(炊飯と味噌汁はプロに依頼)で50名ほどの大合宿が

実施されたが、好評で何年間も続けられることになった。もちろん心配された落石事故は1件もなかった。

夏の針ノ木大雪渓

奥のピーク: 針ノ木岳



長野県・HP より

針ノ木大雪溪のサマー合宿

北アルプスの針ノ木大雪溪は、剣沢の雪溪と白馬大雪溪と並んで、日本の三大雪溪といわれるだけにその距離は長く大きな雪溪である。長野県スキー連盟が合宿を行う6月はまだ全長4 kmはあった。そのうち、3.5 km程のロングコースで練習を行った。ポールセットは大回転(GS)よりスーパーGに近かった。登るのに2時間近くかかり、1日に2~3本滑るのが限界といえた。

オフのトレーニングとして、硬い斜面をハイスピードのロング滑走のなかで、技術アップに目的をおいた。シーズンに入るとスキー場は混んでこのような練習はなかなかできないし、アルペンスキーのレベルアップの基本となる種目はGSというのが私たちコーチ陣の考えもあった。

宿舎の大沢小屋は、中央に通路があり左右1.8 mの床があるだけのもの、その横に小さな小屋もあったが、60余名もの大世帯では入りきれず、私たちコーチ陣はテントを利用した。しかも、食料・燃料・食器・寝具・テントなどすべて持ち込み、ごはんは味噌汁だけは白馬村の山小屋経験のプロに頼んだが、団体の自炊合宿のようなもので、準備も合宿も大変なことだった。

当時、昭和35年(1960年)頃、扇沢の谷は黒部ダム建設の真っ最中、関西電力専用道路なので一般車は乗り入れできず、関西電力との交渉に苦労した。専用道路が国有林地籍であり、そこを管理する大町営林署に宮島久さんと私が勤務していたこともあって、「職権乱用？」して交渉し、バスとトラック4台の乗り入れの特別許可を得て解決することができた。

次は荷揚げが課題。あまりにも多い量に頭を抱え込んだものだ。この解決には、参加する地元の大町市スキークラブ、白馬高校、大町高校、大町北高校のスキー部に応援してもらうことにした。当日は朝早く集合してもらい、本隊が来るまでに往復50分の道のりの荷揚げを1往復してくれた。バスが到着し全員がそろい、残りの荷物を各自の荷物の上に乗せて往路約50分の河原を頑張って荷揚げは終了した。

水の確保も毎年の悩みの種だった。全長300 mほどのセギ(側溝)は落ち葉を除けば良いが、雪溪下からセギまでの引水が問題で、残雪の状況によって水の取り入れ口からセギのところまでの河原が逆勾配になっておりセギを作れないことがある。それを知らず1年目は本当に苦労した。翌年からは大町の友人のアイデアと協力によって、消防ホース2本を借りることができ、これが大成功だった。途中で逆勾配があっても、ホースは間

題なくセギに水をつなぎ念願の大沢小屋まで水が到着した。もう時効とはいえ、大町の友人の名誉のためにも、「消防ホースは何カ所も穴のあいた、使えない古いホース」だったことを付け加えておきたい。

合宿の後半に野菜が足りなくなり、苦肉の策で全員20分の所要時間で、「山菜取り競争」をすることにした。笛を合図に散り、笛を合図に集合だ。あざみ、ごごみ、うど、ふき、タラの芽、竹の子などが山と積み上げられた。さすが信州の山育ちの若者たち、野菜不足は一気に解消した。竹の子は大きいほうから順位を決め、他の山菜は量で順位を決めて商品を与えることにする。カレントウなどの駄菓子が商品だったが、大変に盛り上がった。しかも気分転換にもなり、まさに「一石二鳥」とはこういうことを言うのだろうと、コーチ陣はほくそ笑んだものだ。

大沢小屋から少し離れたところにコーチ陣のテント場がある。夜は選手たちと離れてホッと一息、くつろぎのひと時となる。昨年、飲み残しのウィスキーを岩の間に貯蔵しておいたのを1年ぶりに取り出して飲む。気のせいか美味しく、サントリーの「トリスがジョニ黒になった」と言いながら話がはずんだものだ。

選手は粗食に耐え、厳しい練習に耐えてくれた。山小屋という厳しい環境の中で、選手の明るい表情に私たちは救われた。「アルペン選手として上達しよう、させよう」という一つの目標に向かっての一体感は、素晴らしい行動をしてくれたのだった。この成果は必ずシーズンに表われることを信じて。今年も落石などの事故もなく、無事日程を消化することができた。大沢小屋の横の大きな岩に、この針ノ木一帯の開拓者であり文化人でもあった、百瀬慎太郎さんの詩が刻んである。

「山を想えば 人恋し

人を想えば 山恋し」

この詩を読み返し、来年も針ノ木雪渓で、大沢小屋でお世話になりますと別れを告げ、今年の合宿は終わった。

コーチ・スタッフ(敬称略)

長野県スキー連盟理事：片桐匡

コーチ： 山崎孔子、丸山庄司、笹川正道、田原久、太田金雄、
丸山芳充、宮沢繁勝

スタッフ： 白馬村八方から、松倉真、丸山すみ江（庄司の妹）

翌年は丸山忠昭に依頼し「ご飯と味噌汁」を作ってもらった。おかずなど副食類は、つくだ煮、缶詰などを一括購入して対応した。

風吹大池から池原集落に出る

大町営林署に勤めていた夏のある日、風吹大池近くの国有林に日帰りの出張で出かけることになった。私が20代の若い頃である。業務は、林道脇の資材置き場の拡張による支障木の伐採を土木業者に許可するためだった。

同僚のトラックに便乗させてもらい、大町（現：大町市）の大町営林署を朝出発した。

北小谷村（現：小谷村）の来馬集落から、風吹大池方面に向かって林道を進み、造林小屋の近くが現場だった。

業務は11時頃終わり、造林小屋で早めの昼食をしたが、天候の良いのでこのまま帰るよりも、例の山歩きの「癖」が出て、風吹大池方面まで登ってみることにした。同僚には明日は大町営林署に出勤するのでよろしくと言って別行動となった。

造林小屋の賄いのおばさんに空になった弁当箱にご飯と漬物をつめてもらい、まず風吹大池を目指した。

初めてみる風吹大池はブナの巨木に囲まれ、池というよりまさに「大池」でひっそりとたたずんでいた。こんな高所に静かにたたずむ大池は、何か不気味な感じさえした。

風吹大池を横に眺めながらさらに登り続けた。道は途中で天狗原方面と蓮華温泉方面への分岐点らしき場所にさしかかり、蓮華温泉方面を目指すことにした。30分ほど歩いたころから、道らしきものが無くなり、根曲り竹をかき分けて進んだ。時刻は午後3時を回っていたと思う。

思案の末、引き返すことにした。そのまま進んでなんとか蓮華温泉にたどりついて、翌日出勤に間に合わない。後で思うにこの判断は正しかった。

再び、風吹大池に戻ると、尾根伝いに登山道の標識があり、北野の集落に繋がっていることが分かった。私は造林小屋には戻らずこの標識のルートを選ぶことにした。右に稗田山の崩落地を見ながら、急斜面の続く道を転倒しないように気をつけながら下る。

なんとか北野の集落に着いたときは夕闇が迫っていた。私はほっとした気持ちになり、人家のある安堵感に浸ることができた。北野集落からは生活道路を歩き、石坂の集落を過ぎ、池原の集落に辿り着いたときは、すでに午後7時を過ぎており真っ暗だった。

ここから20分ほどで中土駅のある池原下の集落に出られることは知っていた。そこには旅館もあるのだが、正午からの強行軍でしかも暗闇の中を歩くのは、もう限界であった。

私は遠慮がちに、明かりの灯った家の戸を開けて事情を話し、一夜の泊りをお願いした。その家は、我が親友・田原久さん（現姓：宮島）の実家であると信じてのことである。というのは田原さんから、「俺の家は、池原下から上がると最初の家なんだ」と教えられたことを思い出し訪ねたのである。

「久さんの友人の丸山ですが」と話し、事情を説明し、長い一日がやっと無事終わったことを話すと、突然の押しかけにもかかわらず、田原さんお兄さんご夫婦は、我がことのように喜び、心から温かく迎えてくれた。

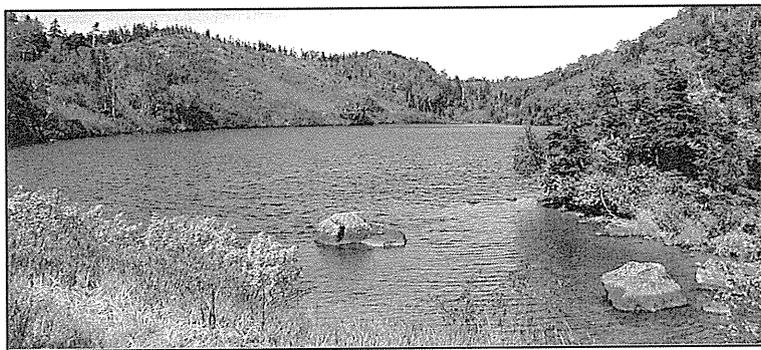
酒つくりの「杜氏」で仕入れたという貴重な「原酒」で盃を傾けながら話が弾み、夜の更けるのも忘れるほどであった。

私は、山歩きの疲れと美酒に酔いぐっすり休むことができ、田原さんご夫妻には本当にお世話になり、このご恩は忘れることはできない。

翌日は気分も爽快に、始発の中土駅から大糸線に乗り、信濃大町で下車し、大町営林署には何事もなかったように出勤した。田原久さんには厚く礼を言い、前日トラックに同乗させてくれた同僚には報告させてもらった。

単独行の登山は何回もしたが、このような強引な山歩きは、反省も込め今も印象に残っている。

私が大変お世話になった、宮島久さんのお兄さんご夫婦のご子息である田原一正さんはN T Tに勤めていて、叔父の宮島久さん同様、スキー選手として活躍し、海外の大会、ロシアの国際大会などに遠征している。



小谷村ホームページより

忘れられた山系・烏帽子岳～針ノ木岳の縦走

北アルプスの縦走路のなかで、針ノ木峠から烏帽子岳のルートは登山者が少なく、「静寂の尾根」とか「忘れられた山系」などと言われている。

地図を辿ると、針ノ木峠～蓮華岳～北葛岳～七倉岳、その近くにある船窪小屋、それに続く船窪岳～不動岳～烏帽子岳のことである。

烏帽子岳からの南方面は、人気の「裏銀座コース」のスタート地点となり、槍ヶ岳に続いている。一方、針ノ木峠から爺ヶ岳、鹿島槍ヶ岳など、以北も人気がある。しかし表題のように烏帽子岳から針ノ木峠のコースは縦走する人も少なく、「忘れられた山系」とも言われる所以か。

私もこの針ノ木峠から烏帽子岳間の縦走路だけ歩く機会がなく、いつか行きたいと思っていた。この尾根・縦走路で唯一の山小屋・船窪小屋の経営者、松沢宗洋さん夫妻は旧知の中でもある。私の勤めていた大町営林署の七倉貯木場（現在の七倉温泉）の近くに登山口があるが、急峻で大変な登山道だと聞いていた。

あるとき、大町営林署の職場の先輩小瀬さんが、私の山好きを知っていて、「丸山君、山へ連れて行って欲しくないか。登山したことがないので」と誘ってくれた。どこでもよいというので、私も初めての烏帽子岳から船窪小屋経由の登山にした。

七倉貯木場から森林鉄道のモーターカーに乗せてもらい、濁沢から登山を開始した。このブナ立尾根は急峻で、女性はスカートや短パンで登るな、「男性に目の毒」と言われるほどの急な坂道を登りきり、烏帽子小屋に泊まった。

2日目も快晴に恵まれた。烏帽子小屋から歩き始め、烏帽子岳～不動岳と北に続く縦走路を快晴の下のんびりと歩く。眼下には黒部川が、正面には立山連峰の眺めが素晴らしい。烏帽子岳で休憩したとき稜線の先を見ると、不動岳～針ノ木峠まで続いているが、稜線はS字のように曲がりくねっていて、針ノ木峠辺りはとても近く見える。針ノ木峠まで8時間以上もかかるとはとも思えない。

しかし、稜線の起伏が大きく、登山道はハイマツの根の露出が多く、破碎帯のような砂利道の個所が続き、不安定で歩きにくい。危険で、気分的にも疲れる縦走路で、時間のかかる理由が分かる。道の補修は大変だろうと感じながら歩く。

ようやく船窪小屋にたどり着き、経営者の松沢宗洋さんに会い、旧交を深めながら大休憩とする。予定どおり縦走はここまでで、下山の道をたどることにした。昨日と同じような急斜面の道を降りて、七倉貯木場を經由して葛

温泉に着いた。天候にも恵まれ、職場の先輩にも喜ばれた山行であった。

2回目は、大町営林署の高山植物保護の業務で、同僚の大蔵勝さんと登った。営林署員の特権？ 業務出張の登山である。扇沢から入山、針ノ木雪渓を登り、針ノ木小屋に泊まった。翌日、蓮華岳山頂から烏帽子岳を眺めると、先に述べたように稜線はS字の

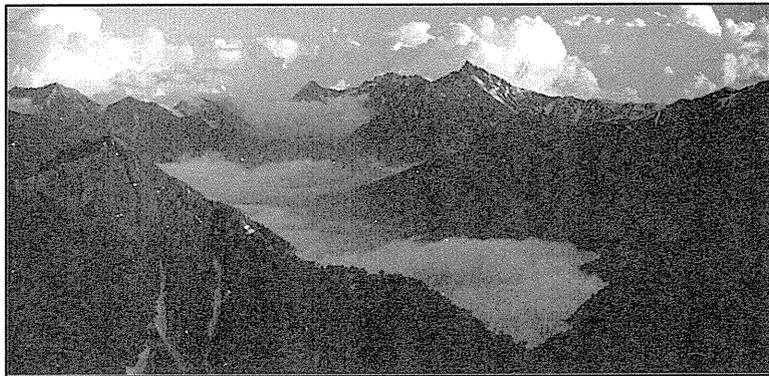
ように曲がりくねっていて近くに感じられる。やはり稜線の登山道は起伏が激しく時間がかかることが分かる。汗にまみれ、「高山植物の調査？」をしながら船窪小屋に着いた。ここからの下山は、先に述べたように曲がりくねった急峻で不安定な道をたどって、七倉貯木場（現在の七倉温泉）から葛温泉のバス停留所に着いた。

前回は、烏帽子岳から船窪小屋まで、今回は針ノ木峠から船窪小屋までなので、私の山歩きは針ノ木峠から烏帽子岳までつながったことになる。

ともかく、今回の山歩きも好天に恵まれ、船窪小屋の松沢さんとはゆっくりと団らんなど、楽しい「出張の山登り」だった。

この2回の登山で、私にとっては、「忘れられた山系・針ノ木峠から烏帽子岳」を歩いたことで、北の白馬岳から奥穂高岳まで、表銀座コースと裏銀座コースも含めて山登りが連なったことになった。

私はこの年28歳となり、昭和38年（1963年）12月に大町営林署を退職したと記憶している。



針ノ木峠から七倉岳・烏帽子岳、穂高・槍ヶ岳（吉富）

5月連休・富士山に登る

1966年（昭和41年）5月の連休に富士山に登った。メンバーは大阪で開業する医師で登山家の住吉薫さん、美智子さんご夫妻と、住吉さんの知人で若い女性3名が大阪から。白馬からは松沢博次、丸山庄司がサポートとして住吉さんに頼まれ同行した。

1日目は夕方、山梨県石和温泉に集結した。当時の石和温泉は温泉が出たばかりで宿も少なかった。

翌日は下見をかねて、スバルラインをマイクロバスで、終点の五合目に到着。五合目の浅間神社に参拝する。

3人の女性は夏山の経験は豊富らしいが、雪山は未経験とのことなので、住吉さんと松沢・丸山が近くの残雪を利用して、アイゼンの着脱と登り方、降り方、スリップしたときのピッケルの使い方などを体験させて宿に戻る。

2日目は素晴らしい好天に恵まれた。マイクロバスで昨日の五合目の終点に到着。いよいよ登山開始。天候も安定して登山日和になりそうである。登るにつれて登山道には残雪が出てくる。急に目の前が開けて雄大な吉田大沢の雪の大斜面が飛び込んできた。吉田大沢は、つい先日の4月26日、三浦雄一郎さんが全長2.5kmの急斜面を直滑降したのである。パラシュートを開き、無事停止に成功した。テレビや新聞などマスコミで大きく報じられた。最大斜度40度、平均斜度33度、標高差800mのプロフィールだという。

余談であるが、三浦さんと私はスキーを通じての親友で、長いお付き合いである。

話はそれだが、私たちはその大斜面を横に見ながら、ジグザグと登山道を黙々と登る。心配した3人の女性は元気で、さすがに住吉さんが選んだ目に間違いはないと、松沢と丸山は安堵の気持ちでうなずき合う。

頂上が近くなるにつれ、さらに斜度がきつくなり全員でアイゼンを着ける。しかしその登山道の残雪のところは急斜面となっていてむしろ危険なので、アイゼンを活かしてコケモモなどの灌木や石の間を直登もした。こうして何度かジグザグの登山道を歩いたり、雪を避けて直登を繰り返していると、突然目の前に鳥居が現れた。富士山頂に立つことができたのである。

白馬岳など北アルプスのような頂ではない。頂上は広い平地状で直径が700mもあり、左側奥に噴火口跡がぼっかりと口を開けていた。その深さは

100mもあるという。

私たちは「無事と好天」に感謝して参拝した。その後、噴火口を中心に一周しもう一度参拝して帰路に就いた。

5月の連休なので思いのほか登山者の姿があった。帰路は登山道の残雪のスリップに注意しながら無事五合目に戻ることができた。素晴らしい思い出の富士登山だった。

「住吉パーティの富士山登山」の思い出をたどるうちに、友人・三浦雄一郎さんからいただいた単行本「すばらしき冒険野郎三浦雄一郎」の富士山直滑降に挑んだ状況を読んでいたら、偶然に昭和41年5月4日の遭難の記事を見つけた。

登山歴40年というベテラン登山家が7号目付近で突風のために、瞬間的に吹き飛ばされ、全身打撲、骨折を負ったうえに滑落、死亡したという。一本のピッケルは二つに折れ、もう一本は三つに折れていたという。その頃、5合目の佐藤小屋のガラス窓が全損したことが後で確認されたという。

私たち住吉パーティは連休の何日だったのだろうか。博次さんと記憶をたどったが、連休の頃だったという記憶は確かなので、二人で連休初めの4月末頃ではないかと推察した。そうでなければ、あの遭難事故を知らないはずはないと思うからである。

北アルプス山岳救助隊と大町営林署班

昭和30年（1955年）ころから登山者が多くなり、それに合わせて山岳遭難が増加傾向になっていった。山岳遭難が発生すると地区の駐在が窓口となり、山案内人組合などの協力をえて処理していた。

しかし、昭和31年、大町と豊科の両警察署、関係の市町村、山案内人組合、山小屋経営者などが中心となって、北アルプス一帯の「山岳遭難の救助対策」が検討された。

北部地区の担当範囲は、高瀬川流域と以北の小谷まで、手前は有明山の辺りまでで、南部地区の担当範囲は燕岳～穂高岳方面以南だったようである。

それを受け、昭和31年（1956年）北部地区は「北アルプス北部山岳遭難防止対策委員会」を、大町警察署、大町営林署、市町村、山小屋、山案内人組合などで設立した。そして、「北アルプス北部地区山岳遭難者救助隊」が正式に組織されたのである。白馬の大谷定雄氏が初代会長となった。

そのころの救助隊が、大町地区の「南部班」、白馬・小谷地区の「北部班」、さらに「大町営林署班」の三班であったことを知る人は少ないと思う。ここで大町営林署班が設立されたいきさつを記すことにする。

現在の山岳遭難救助はヘリコプターが主体であるが、当時の山岳遭難救助活動を振り返ると、怪我人の収容と、遺体の搬出のすべてが人力であった。

現場で遺体を収容し、まず亜高山帯まで降ろす。さらに集落までの地形が悪く搬出が困難なときは、ダケカンバなどを伐採し、その場で茶毘に付して、遺骨を持ち帰るケースが通常であった。

国有林の樹木を伐採するには、営林署が立ち会うことになる。営林署長は管轄の担当区や岳に詳しい署員を派遣し処理させていた。しかし、山岳遭難の現地に同行して処理することになると、当然のことであるが救助隊と同じ活動をするようになる。

大町営林署に、そのような人材がそろっていたことは外部の関係者にも理解されていた。こうした現状を知る大町警察署の横山次長と大町営林署上条武庶務課長の両氏が、山岳遭難救助の諸問題の処理、円滑化をはかるためには「大町営林署班」の新設が重要であるとして尽力されて実現したのである。

なお、上条氏は、その後も長野営林局と交渉し、特別予算でシュラフザ

ック、ザイルなど救助隊の装備品をそろえた。

こうして「大町営林署班」は発足し、夏期には仏崎観音の岩場で、岩登りに挑戦し、ザイル操作の訓練をした。また、厳冬期には外部講師を招いて、八方尾根でテント設営して積雪期の山岳での活動の訓練も行った。

その後は、遭難のたびに救助要請がくるようになり、大町営林署員は署長命令を受け、四季を問わず山岳遭難の現場に飛び出して行った。こうして大町営林署が「山岳遭難救助」の一翼を担ったときがあったことを、今では知る人もないのではと思いここに記すことにした。

(注) 上条氏は退職後「孤高の道しるべ」(600頁に及ぶ大作)で、北アルプスの山岳史をたどる書籍を出版した。膨大な資料を整理し、北アルプス登山の埋もれた史実を掘り起こした。今までの山岳書籍にもメスを入れ、関係者に影響を与えるとともに親しまれている。山岳関係者には必携の書籍である。

今思えば大町営林署庶務課長時代に、山岳救助隊大町営林署班の設立に尽力された姿と「孤高の道しるべ」は太い糸で繋がっていたことを感じている。

1 1月の鹿島槍ヶ岳遭難の搜索

山岳救助隊大町営林署班の発足後は遭難のたびに召集されることが多くなった。

1962年（S37年）11月の初冬であった。このときの北アルプス一帯は大荒れで山岳遭難が相次いで発生した。

北鎌尾根で発生した遭難の救助にも北アルプス山岳遭難救助隊が派遣された。その中の、救助隊白馬班の白河敏夫さんが救助活動中に転落遭難死されるという痛ましい事故が発生した。山岳遭難救助隊が発足して初めてのことで、同郷で顔見知りだけに強い衝撃を受けた。隊員には大町営林署班の和田清家、木村守文もいた。

また、私もそのとき、やはり遭難救助のため鹿島槍ヶ岳地域に入っていて、無線で事故を知り衝撃を受けた。

【1日目】

遭難救助のため、大町営林署班の大蔵勝と丸山庄司は、大町班（大町山の会）の3名と共に、鹿島槍ヶ岳登山口の大谷原で救助に向かう準備をしているときだった。無線が入り、北鎌尾根の二重遭難を知り衝撃を受ける。その後、和田、木村は無事との連絡が入り安心する。

鹿島槍ヶ岳の行方不明者は、八十二銀行の行員で単独行との連絡が入る。

私たち搜索隊5人は、情報を分析し鹿島槍ヶ岳の南峰に伸びる北股本谷に向かって一帯を搜索することにした。

大谷原から入り、台地から北股本谷の下部など搜索を続けたが発見できず、しかも上部に行くとも小石ではあるが落石が多く危険なので、1日目の搜索を断念して改めて明日行動することにし台地付近まで戻った。

大町班は来た道をたどり、大谷原に引き返すという。大町営林署班の大蔵と丸山は、日暮れまでには十分な時間があるので、落石の少ない中岩沢方面をもう少し搜索してから赤岩尾根の登山道に出て下山することにし別行動をとった。しかし、この赤岩尾根に出るルートを選択は誤算であった。

赤岩尾根の登山道に出る沢の上部は草付きの急斜面となり、足場は滑る、手掛かりは草だけ、靴先でステップを切りながら腹ばいになってよじ登り、なんとか無事登山道にたどり着くことができた。二人で安堵したことは今も忘れられない。

【2日目】

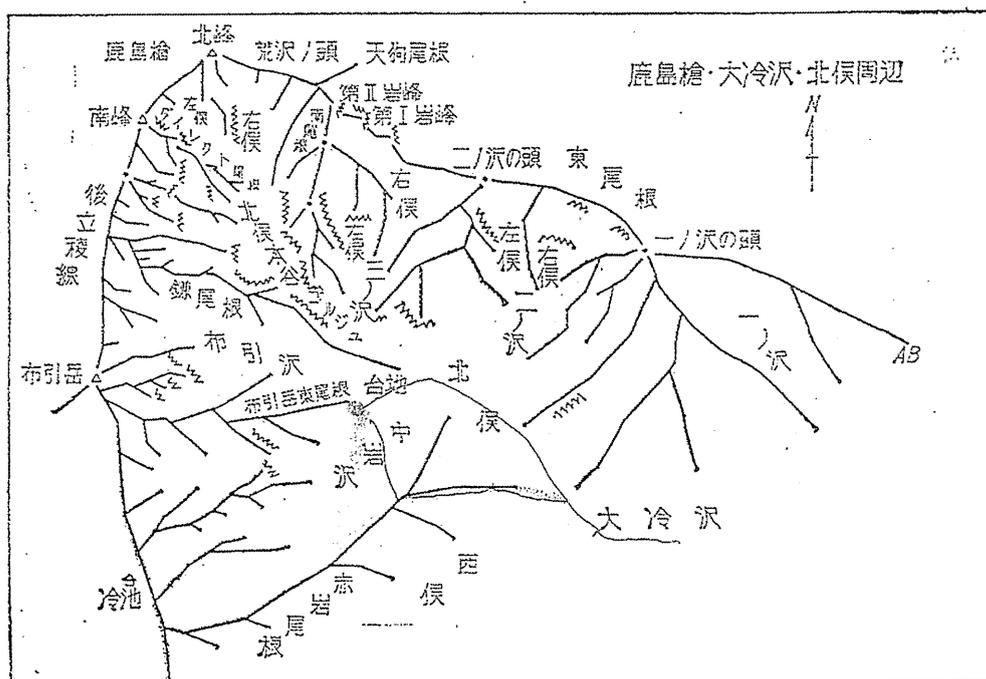
私たちは、早朝に鹿島部落を出発し昨日の台地まで戻った。昨日の搜索地

点と周囲の状況を分析し、布引岳東尾根から捜索を開始した。予想したとおり、取り付き地点の岩壁をよじ登ると狭いテラスがあり、そこで遭難者を発見した。

やはり、八十二銀行の行員で単独行での遭難だった。遭難者は半身シュラフに入り、ビバーク用のテントをかぶり、手にはウイスキーのポケット瓶をもち眠っているようだった。

手元には、プラスチック製の小さな貯金箱もあった。正月に子供たちにあげる八十二銀行のものだった。

私たちはその場で遺体を整え、テントに包んで搬出に備えた。岩壁の下降は、大町山の会福島融会長の見事なリードで、ザイルとカラビナなどを使い慎重にも手際よく行動し、岩壁の下の安全地帯まで降ろすことができた。岸壁から下は河原状なので、灌木を伐って「芝そり」を作り搬出することにした。5人で担いだり引いたりして、大谷原には順調に着き、警察と遺族にお渡しすることができた。



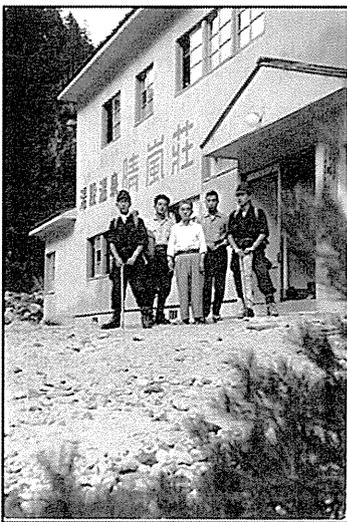
槍ヶ岳・小槍、遭難者の遺体収容

1962年（昭和37年）8月だったと思う。大町営林署で執務をしていたら署長室に呼ばれた。北アルプス槍ヶ岳山頂付近で、登山者の遺体が発見されたので、その収容に行くようにと、出張命令を受けた。署長によるとメンバーは、大町警察署、大町案内人組合、大町営林署からの各1名、計3名ということであった。名簿を見ると、私を含めて3人は、北アルプス山岳遭難救助隊の隊員であった。

場所は、槍ヶ岳の隣にそびえる小槍の付け根のようなところだという。クライマーが小槍に挑戦するために入ったら、遺体を発見したということであった。1年前に槍ヶ岳山荘に宿泊したあと、行方不明になっていた方だという。私たち3人は高瀬川から入り、1泊目は湯股温泉の晴嵐荘に宿を取った。

2日目は、早朝に出発。懐中電灯を利用し、伊藤新道を登った。夜が明けはじめたころ、登山道を外れ、千丈沢側を遡った。岳樺帯を抜けたので、小槍を目指し直登することにした。急斜面を、ハイマツやコケモモを利用し、お互いに落石を起こさないよう細心の注意をはらい登攀した。小槍の岩盤が近くなってきたころ、小槍の付け根といわれるところを探したら遺体を発見できた。

私たち3人は持参した、麻袋と麻縄を利用して遺体を収容したが、困難を極めた。なんとか岳樺のある地帯まで降ろすことができたとき、3人で無事を確認し握手し合った。そこには、他のメンバーが岳樺を伐採して作った茶毘の棚があった。棚は1mに切りそろえた岳樺を高さ1m、長さ3mほどに積み上げてあった。私たちは遺体を茶毘の棚に安置し点火した。茶毘を済ませることができ、日暮れに湯股温泉にたどり着き、長い一日は終わった。



翌日、葛温泉に戻り、骨壺と遭難者が身体につけていた皮ベルトを遺族に渡した。しかし、遭難者を発見したときの状況を話す気になれなかった。遭難救助には何回も山に入ったが、危険で、つらい遺体の収容であった。現在ではヘリコプターでの収容だが、当時はすべてが人力だった。

湯股温泉・晴嵐荘 左から:大町署・丸山・支配人・竹村(経営者)・大町署

山岳遭難救助訓練が八方尾根で行われる

1968年2月28日（昭和38年）2泊3日の日程で、大町営林署、大町警察署、北ア遭対協白馬班の合同企画で、雪山の山岳遭難救助訓練が行われた。参加者は25名だった。

昨年11月、北鎌尾根で遭難救助中に救助隊員の白河敏夫さんの転落死という、痛ましい二重遭難事故が発生した。その状況の中で、冬季の遭難救助訓練の必要性から計画された。

特に大町営林署班は、雪山の遭難救助の経験の浅いメンバーもいて、大町営林署班の班長である島田兄一庶務課長の配慮で、班員全員17名が強制参加することになった。大町営林署と白馬班からも8名が派遣された。

テント一式、ラジュウス（コンロ）、ピッケル、シュラフザック、食料、スキー用具一式と共有物を分担すると結構な量と重さになった。大町営林署班は、朝の9時30分に大町営林署庁舎前に集合し、森田管理官の挨拶を受けて出発した。

車で移動し、細野から白馬ケーブルで兔平終点到着。ここから、キャンプ地の黒菱平に向かう。スキーヤーで賑わう急斜面を、一列になって黙々と登った。

大町営林署班がテントを設営し、雪のブロックで作った風よけが完成したころ、大町警察署と白馬班のメンバーが到着合流した。そのころ、取材のNHKラジオ松本支局、SBCテレビも到着した。

講師は、日大山岳部OBの大蔦氏（大町市出身）である。2泊3日の日程で、第3ケルン往復のなかで様々な体験をするべく計画された。おりしも降雪と強風が続き、悪天候の中で救助訓練は行われた。急斜面の登行と下降における、ザイルとピッケルの操作など、またハンドトーカーの扱い方も体験する。残念なことに悪天候で、目標の第3ケルンまでの登頂は、大蔦講師の判断で断念した。しかし、吹雪と強風の中での訓練は身にも応えたものになった。

最終日は、テントを撤収し、全員でケーブル終点の兔平に下降し、本体はケーブルで下山した。一部の参加者は細野までスキー滑走。全員で遭対協の大谷定雄会長に報告し、挨拶を受けて解散した。

※ ある隊員のメモ

3日間はあるという間に終わった。しかし短かった3日間に得たものは多かった。刻々と変わる自然、人間の力ではどうにもならない、ではどうすれば良いのか？

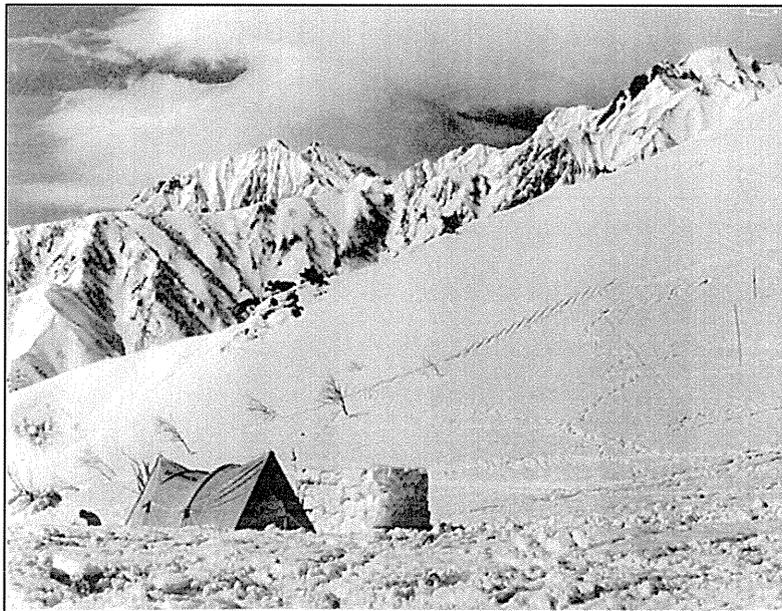
こうした訓練が行われなくても、遭難があれば救助しなければならない。

今まで、ともすれば体力に任せて、無理しがちだった。今回、基礎知識の訓練が行われたことに深く感謝したい。

私たちの中にも少しずつではあるが自信らしきものが出てきた。こうした訓練を反復するなかからもっともっと知識を深めていきたい。

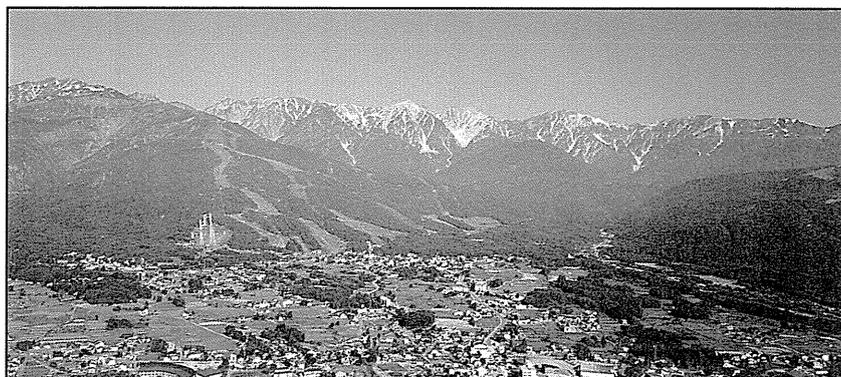
そして、これからも、遭難救助にできるだけ協力しなければならない。とはいえ、山の遭難が一つでも少なくなってくれることを、心から願うものである。

雪のブロックで防風・八方尾根



八方尾根と白馬三山

(八方尾根・不帰ノ陰・白馬鑓ヶ岳・杓子岳・白馬岳)



白馬村 HP より

銀メダル・猪谷千春選手を迎えて全日本選抜スラローム大会開催

全日本スキー連盟は、1956年（昭和31年）4月1日、志賀高原・丸池において地元山ノ内町などの協力で「全日本選抜スラローム大会」を開催した。

この2月に行われた、イタリアのコルチナ・冬季オリンピックの回転競技で、日本初の「銀メダル」に輝いた猪谷千春さんと杉山進さんの歓迎をかねて行われたものだった。

S A Jは全国から32名を選抜した。その中に長野県からは藤島幸造、山崎孔子、中村孝光、田原久、太田金雄、大谷増美、丸山庄司が選ばれた。

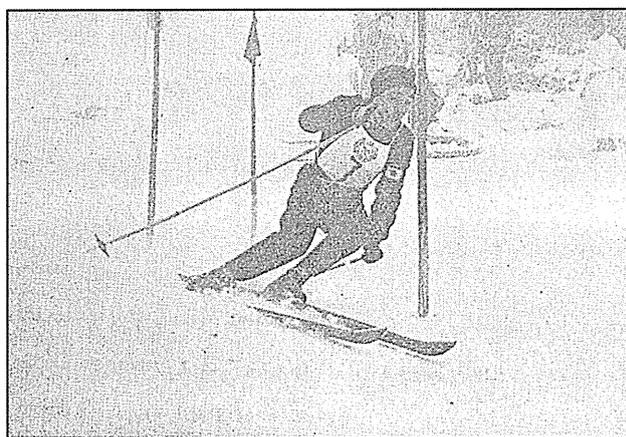
会場の丸池ジャイアンツコースに1回目83双旗、2回目79双旗がセットされ、気温-2℃、雪温0℃の、アイスバーンの好条件の中でレースが行われた。

優勝は猪谷千春、2位杉山進、3位岡田幹夫（日大）だった。

閉会式は丸池スキーハウス前で行われたが、日本初のオリンピックメダリスト・猪谷千春さんの存在は大きく、多くの観衆が詰めかけて盛り上がり、天候にも恵まれ素晴らしい全日本選抜スラローム大会であった。閉会式が終わったのは、午後4時に近かったと思う。

その後、大谷増美さんの案内で、万座温泉めざしてナイタースキーツアーを体験することになる。

初めての銀メダル



体調は絶好、思いきり飛ばした猪谷選手の滑り

志賀高原から万座・草津のスキーツアーを体験

全日本選抜スラローム大会（前頁）閉会式の直前だった。大谷増美さんが田原さんと私に、「今夜は私の勤める国土計画の万座温泉に泊まろうではないか」と勧めてくれた。私たちは今日中には、我が家には帰れないので、何処に宿をとろうかと話していた時だった。「明日は草津温泉に滑り込み、草軽電鉄で軽井沢から帰れば」とすすめてくれたのだ。

私は、丸池から熊の湯方面は、まだ未知のところだったので興味もあり、田原さんと相談しお願いすることにした。

丸池を出発したのは午後4時頃だと思う。平床のロッジでお茶をいただき、渋峠のヒュッテまで、長い急斜面をスキーを担いで、夕暮れ迫るなか、汗だくでなんとかたどり着いたが、空腹でグロッキー、増美さんの「顔」でヒュッテのストーブの横にあった、おやきなどを詰め込みようやく落ち着くことが出来た。

山田峠までの滑走は転倒で怪我をしないよう細心の注意をする。すでに日はどっぴりと暮れていた。この山田峠は風が強く山岳遭難の場所として有名であることは新聞で知っていたが、今日は無風で、しかも月夜明かりに救われる。

ガイドの増美さんが山田峠でスキーを外しながら、この斜面を登ればあとは下りだけだという。斜面を登り終え、呼吸を整えて再びスキーをつけ、ハイマツなどの灌木を避けながら、月と雪明りの中での滑走が続く。ようやく万座温泉の灯が見え、ホテルにたどり着く。

すでに、時計の針は9時を指していたと思う。遅くなることは覚悟していたが少し予想外だった。緊張したレース後だけに、ハードな行程だったが、終わってみれば「楽しいスキーツアー」であった。

ホテルでは、覚めた身体を温めてくれたあの白濁の温泉と、ガイドをしてくれた増美さんに感謝を込めての乾杯の味、今も忘れられない。増美さんは、当時「国土万座」として長野県スキー連盟に登録していて、長野県の国体予選など、スキー大会ではいつも一緒に、3人は勝ったり負けたりの仲だった。

増美さんの仕事は、万座と渋峠間の案内だとか、ハードな仕事で頑張っていたのだった。その話の中だと思うが、オーナーの堤義明さんから、高価なスキーをいただいたことを話され、レースにも使用したと聞いた。

翌日の4月2日も好天に恵まれた。増美さんと別れ、田原さんと二人で、昨日滑り込んだ斜面を登り、現在はゴンドラの駅舎などがある草津温泉側に向かい、振子沢上部に出た。振子沢の斜面は積雪充分、草津温泉近くのグレ

ンデまでの長い距離を滑り込む。シーズン最後の記憶に残る春のスキーツアーとなった。

その後は、志賀高原はすべてのスキー場を滑ったし、草津温泉も国体スキー競技会やスキー大学などで何回も訪ねたが、「志賀高原～万座温泉～草津温泉」のスキーツアーはこの1回だけだった。

草津温泉から草軽電鉄に乗り軽井沢に向かう。草津温泉の硫黄を運ぶために建設されたというだけあって車両は質素なものだった。乗客の私たち2人と硫黄を積んで、曲がりくねった線路をコトコトと歩くよりは早い程度に走る。周りの景色もゆっくりと変化する様子に、何か親近感を覚えた記憶がある。

その後、草軽電鉄は廃線になっただけにこの体験は忘れられない思い出となった。

この頃、テレビで草軽電鉄の歴史を振り返る番組を見て、当時のことを思い出し新聞の記事などを参考に、この雑文を書いた。現在も、軽井沢には善光寺をモデルにした駅舎やカブトムシと言われた機関車が展示されているという。いつか訪ねてみたい。



志賀高原フォトコンテスト作品: YOSHIKI さんの作品(一部トリミング)

良き思い出の大町営林署勤務

7月に家族で、黒部ダムの下流、黒部川沿いの地下に作られた「黒部第4発電所」を見学する宇奈月温泉経由のツアーに参加した。黒部ダムは何回も見ているが、その巨大な地下発電所や長いトンネルなど目の前にして、スケールの大きさに驚いた。関西電力のガイドが、工事は「自然との闘いであり挑戦だった」と、映画「黒部の太陽」にもなった、破碎帯の難工事などの説明をしてくれた。それを聞きながら建設当時のことを思い出した。

今は観光客で賑わう大町側のルートは、市街地を外れるとほとんどが大町営林署の管轄する籠川谷国有林である。資材輸送の道路や臨時宿舎の建設などで、大量の伐採が必要となった。たまたま、私の担当が立木処分係だったので、その「支障木」の伐採許可の処理に追われた。あまりにも件数が多く関西電力は助手として女子事務員を数年間、大町営林署に派遣したほどであった。あるとき関西電力の方が見えて、「トンネルの中間地点で大量の出水が止まらず、大町ルートの工事が中止になるかも知れない」と嘆いていたことがあったが、それが後にいう「破碎帯」のことだった。

私の入署は昭和28年。最初は大町事業課、直営生産事業の現場に配属された。国有林の現場で、伐採から山出しの数々の工程を経て、信濃大町駅の貯木場までの木材管理と、現場での各種作業員との連携プレーは、高校を出たばかりの私には新鮮で、数々の経験を積ませてもらった。伐採、一本ぞり、木馬、トラックなどそれぞれの職種ごとの出来高払いなので木材の数量をチェックする「検知」の仕事もあった。材木の太さの呼び方は独特で「コメの権兵衛」（コメツガの5寸）、「メコのハライタ」（ヒメ小松が1尺）など計測して、流れるように読む。相手がそれを受けて記帳する手順だった。

営林署での通常の業務のほかに、長野営林局スキー部と北アルプス北部山岳遭難救助隊大町営林署班の活動があった。出身地が白馬で、スキーや登山をしていたので、自然な流れで続けさせてもらった。スキー部員は長野営林局計画課と、飯山、大町の両署に配属され、冬になると野沢温泉の緑雪寮で合宿し、全日本スキー選手権や国体スキー大会などで全国各地を転戦させてもらった。企業がスキー部を持つ趣旨と違い、雪国の国有林の管理にスキーは欠かせないものとして、各署員にスキーを推奨していた時代だった。その延長線上にスキー部があった。北海道の各営林局、青森、秋田、山形にもスキー部があり、全国大会になると同じ宿舎で「呉越同舟」、旧交を暖め競い合ったものだ。

時代の流れで昭和32年、スキー部を解散することになった。大学の推薦を受けて20歳を過ぎて大学に入学し学生として選手を続ける者、職場に残り選手は引退する者、そしてスキーは地域クラブに所属して続けようとする者が4名残った。私もその1人だった。ある日、署長に呼ばれ、署長会議で後援会をつくるので「長野営林」で続けてほしいといわれた。管内の職員1口1000円で300万円余が集まったと聞いた。4人で3～4年は活動できる金額だった。うれしかったし、皆さんの温かい気持ちに感謝した。今まで10数人いたが、そのシーズンは4人で、「長野営林」として長野県スキー選手権大会の団体優勝をした。皆さんに少しお返しができたとホッとしたことを思い出す。しかし、さらに甘えることが気持ちの上で許さず、2年目は残金で管内の造林小屋など電機の無いところに自家発電機を購入してもらい、長野営林局スキー部と後援会は解散させてもらった。

大町営林署管内は北アルプスがあり山岳遭難が多い。当然のとして署は地域に協力する状況に置かれていたし、メンバーも揃っていた。12月初冬、槍ヶ岳の北鎌尾根で遭難救助活動中に救助隊員が転落死する二重遭難事故が発生した。私は仲間と鹿島槍ヶ岳の遭難救助中で、そのことを無線で知った。8月の登山シーズン、槍ヶ岳直下に腐乱死体発見の報で署長に呼ばれた。大町警察署、大町案内人組合、大町営林署では私の3名で現場に向かう。ヘリコプターのない時代、何とか立木のあるところまで降ろし茶毘に付し、葛温泉で遺族にお渡ししたこともあった。グリーンパトロールでは2人1組で管内の出張登山もさせてもらった。そうして、長野県認定の、北アルプス一帯の山岳ガイドの資格も取得できた。

10年間勤め29歳のとき退職し、家業の農業と旅館経営に戻った。現在74歳となったが、振り返ると、営林署の環境も仲間もよかった。私はその延長線上で人生を歩んだと思う。長かったスキー界の活動も、2年前、公益財団法人全日本スキー連盟専務理事を最後に身を引いた。その継続の証として、昨年秋の叙勲で「旭日双光賞」の栄に浴した。振り返るとその「礎は営林署で培われたもの」と改めて思い、心から感謝している。

長野長生会 大町支部 丸山 庄司

背景概観・白馬山案内人組合誕生前史

観光白馬の歴史を辿ると、四季を通じて、その昔も、そして今も、「岳」と「山」に深いかかわりを持って歩んでいる。

その昔、白馬の人たちは目の前に聳える、白馬連峰とそれに続く山々の影響を受けて生活してきた。狩猟や山菜などの恩恵を受ける一方で、田畑や橋梁の流失など水害にも遭遇しながら、それを乗り越えてきた。

山を愛し尊び、あるときは山を恐れながらも、山の奥深く入り込み、様々な体験をし、山から諸々のことを教わってもきた。

明治の初め、白馬岳に測量や学術調査のため、人々が訪れるようになった。白馬の人たちが協力して行動し、「山案内人」への道に進んだのも自然の成り行きであった。

それは、生活の糧だけではなく、白馬に生まれ育ち「岳が好き」で「岳に憧れ」「健康な身体」であり、何事にも「積極性」があったればこそ、だったのであろう。

(1) 白馬山国有林とのかかわり

明治の時代になり国有林の監視員制度ができた。白馬山国有林に近い、細野（八方）の丸山常吉（嘉永元年～大正9年）が、この仕事をしていて国有林一帯の状況に精通していた。細野には数人が常吉に並んで山や岳に明るい人がいたようである。

※常吉は後の明治39年に、白馬をこよなく愛した植物学者の志村烏嶺を案内している。

その後も、国有林との関係は継続された。後に山案内人として活躍した、丸山静男、大谷定雄も若い頃に、高山植物の監視を行い、白馬岳一帯を歩き回っている。

(2) 白馬山頂に一等三角点の撰点

明治13～14年ころ、白馬岳に地図作成のための国土地理院の技師が測量に入っていた。白馬山頂に一等三角点の撰点されたのは、明治26年7月7日であり、造標は明治27年10月7日であった。また観測は明治30年7月に行われている。この測量には、地元の若者が人夫として協力している。

(3) 鍾温泉の引湯と挫折

明治の時代になると、職業と行動の自由が認められ、文明開化、産業開発が進められるようになった。明治9年7月、2年間の準備を経て、細野の丸山九一、丸山盛代、丸山幸吉は鑓ヶ岳直下2100mに湧出する温泉（白馬鑓温泉）を二股までの引湯工事に着手した。竹樋を使つての引湯計画で、工事は上部から始められた。

しかし、旧暦の明治9年9月23日（太陽暦：11月8日）新雪雪崩が発生、双子岩の下にあった宿泊小屋を直撃した。現地監督の丸山九一をはじめ細野の6人、安曇村稻核（松本市）などの15人、合わせて21人が死亡、生存者は30人という大惨事になった。白馬岳の開発史に伝えられる、大変悲しい事故であった。

（4）明治16年・最初の知識人の登山

北安曇郡長の窪田畔夫（45歳）、仁科学校校長（大町小学校）渡辺敏（36歳）、北城学校校長（白馬北小）豊島三男人（26歳）、同校教員加納直貫（42歳）の4人のメンバーに、一行が宿泊した四ツ谷（白馬町）坂井屋の福島広吉、佐野の猟者で山岳通の田中兼次郎、そして導者3人の一行9名は、明治16年8月21日、1泊2日の行程で白馬岳に登頂した。導者（案内人）は営林署から官林の管理を任されたり、測量の人たちと登っている細野の人たちであろう。

この登山は、白馬岳における快挙であると同時に、日本の近代登山史上においてもきわめて初期のもので、画期的な山行として特筆に値するものである。

（5）植物学者の登山

大町小学校長の河野齡蔵と七貴小学校の松岡邦松の二人は、高山植物の研究者でもあった。明治31年8月15日、2泊3日の日程で山案内人を雇い、大雪溪から白馬岳、白馬鑓ヶ岳、白馬鑓温泉を経由して登山している。

その翌年、「植物学雑誌」などに、白馬岳の高山植物の素晴らしさを発表すると、白馬岳への植物学者の登山が増えていった。

また、武田久吉は、登山家、植物学者ばかりではなく、山村の民族にも造詣深く、白馬山麓を世に紹介している。前出の志村烏嶺も、白馬岳をこよなく愛し、1年に数回も白馬登山するなど、80歳を超えてもなお山頂を極めている。

また、明治35年に地質学者山崎直方が大雪溪で「氷河」の存在を発見し発表している。

（6）鉱山の開業と硫黄採集運搬道は登山者へ便宜を与えた。

明治34年大雪溪付近と、明治39年大黒岳の富山県側で、銅の鉱脈が発見された。山案内人の松沢菊一郎(新田)は大黒鉱山の発見者の一人である。

※大雪溪の鉱石発掘、搬出には、細野の丸山広太郎、丸山嘉吉、丸山吉重は人夫頭として活躍している。

搬出の道は、二股から白馬尻まで、また、平川入りから大黒岳の肩へと作られた。更に 大正の年代になって八方尾根経由の道もでき、これらの道は登山者へ利便を与えた。

また、硫黄はマッチの出回る前まで、「つけ木用」として、なくてはならない貴重なものだった。白馬鑓ヶ岳の裏、朱殿坊山は硫黄の山であり、また、猿倉の上の三次郎などにも硫黄があった。人々は自家用だけでなく、大量に採集して商売にしていた。

(7) 山小屋の建設

明治39年、白馬山頂手前にあった、測量のために使用した岩室を改造して、山小屋を建設した。現在の「白馬山荘」で、北アルプス最初の山小屋である。白馬館の松沢貞逸は2年後には、白馬尻小屋も新設した。登山者に好評で、新たな登山形態の幕開けとなった。

(8) スポーツ登山の時代を迎える

学術登山で白馬岳の素晴らしさが世に広まり、登山は大衆化した。明治27年イギリスの宣教師、ウェストンが蓮華温泉から白馬岳に登っている。これが「スポーツ登山」としての始まりといえよう。

この明治20年代は、天候の安定する夏に、目的の山に登り、登頂後は再び同じコースを下山する「単峰登山」が主流であった。

明治34年、北安曇教育会が白馬に団体で登山、同36年にも大町中学校が、21人で登山し「団体登山」の始まりとなった。

明治40年頃になると日本の高山はほとんど登りつくされ、単峰登山から「縦走の時代」へと移っていく。

大正の時代になると、松本50連隊や、宮様の登山も盛んになってくる。そして、山案内の需要増とあいまって、北城村全域から山案内人が出るようになり、その人数も増え、さらに充実した山案内の活動へと歩みはじめる。

(9) 明治から大正の時代に活躍した山案内の先駆者たち

明治30年代の後半から登山者が急増した。その頃の白馬の人たちは、山案内人として積極的に活動している。案内人を尊敬して「導者」又は「東導者」と呼び、歩荷とか人夫とは言わなかったという。

ここに、活躍した山案内人(導者)たちを、資料を辿り紹介する。

*丸山広太郎(細野、現八方) 白馬鑓温泉引湯の計画者であり、雪崩で亡くなった九一の子供で、官林の巡視員として、養父常吉に連れられ山を覚えた。明治38年夏、志村鳥嶺の一行、武田久吉、川田黙の一行、小川荘魚の一行を白馬岳に案内。明治44年7月高野鷹蔵一行、8月には冠松次郎を案内して白馬から清水岳を経て祖母谷温泉に下っている。

*丸山嘉吉(細野) 官林の巡視員を務めていた。明治38年の夏、志村鳥嶺を白馬に案内、明治44年7月中村孝二郎と大黒鉦山から五竜岳を経て、八峰キレット初通過している。

*丸山徳十(細野) 明治44年8月、冠松次郎と白馬岳～清水岳～祖母谷の難コース踏破している。

*丸山市三郎(細野) 明治44年7月、高野鷹蔵らと、白馬から祖母谷の記録を作った。

*丸山直次郎(細野) 明治38年8月、川島禄郎と白馬岳～清水～柳又～北又～小川温泉と、藩政時代黒部奥山廻役が歩いたコースをたどった。

*丸山善次(細野) 明治44年7月高野鷹蔵らと白馬岳～祖母谷へ初めて下った一人。

*丸山利雄(細野) 明治44年7月中村孝次郎らを案内して五竜から八峰キレットを初めて通過、翌年には穂高連峰の開拓者鶴殿正雄を白馬岳へ案内した。(祖父である)

*丸山美智弥(細野) 明治44年7月高野鷹蔵と白馬岳から祖母谷に下った。

*丸山磯吉(越後) 細野で粉引き業をやりながら山案内をしていた。明治44年7月八峰キレットを中村孝次郎の一行と通過している。

*丸山吉十(細野) 丸山徳十の兄、北安曇郡教育委員会発行のガイドブック「白馬岳」に精通した案内人として推奨している。

*松沢菊一郎(新田) 大黒鉦山の鉦脈発見者の一人、明治41年7月三枝威之助を案内、五竜からキレットを通過し、鹿島槍に出ようとしたが通過できず、野宿して生米をかじりながら大川を下り鹿島部落に出ている。

*丸山岩司(細野) 大正4年の夏、山岳画家茨木猪之助と白馬岳周辺で10数日滞在。大正9年、大谷定雄を後立山全山縦走に同行させた。当時後立山を案内できる人は少なかった

*大谷豊吉(細野) 鉦山師として後立山、剣、立山方面にも明るく大谷定雄が大正13年初めて剣立山方面に連れて行ってもらっている。

*横澤房吉(新田) 大正13年馬場忠三郎の一行と、杓子尾根を登り白馬山頂を回って、大雪溪を下っている。この頃はもうスキーの時代で、一行はスキーを使っている。

*高橋宗吉(細野) 大正3年8月、お客様を案内し後立山を縦走中、八峰キレットで、手をかけた岩が崩れ、岩とともに谷に転落遭難死した。現在のキレット道だが難所で、当時道はなかった。

「参考文献」

村誌白馬の歩み。観光。登山。スキー編(四)、北アルプス白馬連峰長沢武著

この原稿は、白馬山案内人組合創立100周年記念誌の原稿
丸山庄司が担当 2019年11月10日発行

昔の雪国の生活

雪国の冬の交通は、列車以外はすべて徒歩で。降り積もる雪はすべて踏み固めて道を作った。除雪という言葉は鉄道の線路だけに使う言葉だった。白馬では、それが昭和30年代まで続いたと思う。直径45cm程の丸い型の「かんじき」を足につけて、新雪を踏み固めるのである。

足を小刻みに足踏みするような感じで少しずつ前に進み、それを何回も往復することで道幅も1m程になり歩けるような道ができあがる。子供の短い足で幅広いかんじきを操るのは大変なことだった。足がもつれ、しかも体重が少ないので深雪のときは雪が固まらず思うような道にならず、苦勞させられたことを憶えている。

雪の少ない松本市に住む友人が、「雪かき」をすると言っていたが、その頃の私にはその意味がわからなかった。大量の雪を手作業で片付けられるものではないからだ。

この雪道作りは、各家の分担が決まっていた。西隣りの家に向かっては電柱のところまで、前の家の方へは橋の真中までなどと、集落の中は細かく取り決められていた。集落と集落を結ぶ道も同じように決まっていた。

雪が降るとどの家も夜明けとともに起きて、「雪踏み」が始まる。両隣りのおじさんが見えても、自分の分担を行ったり来たりしているので、なかなか挨拶のタイミングが取りにくい。そして、うまく顔をあわせた時の会話が面白い、「おはよう」なんてことは言わず「えれえ降ったもんだ」「2尺はあるぜ」「きのうの大会は惜しかったなあ」などと足は休めずに言葉を交わしたものだ。

自分の分担が終わったら、遅れている隣りの手伝いをする約束のようなものがあつたので、ずる休みを決め込むわけにはいかなかった。中学になると男の子は、学校に行く前にこの道作りをやらされた。「隣りの昭雄はもう道踏みをしているぞ、早く起きろ」なんて、叱られながら、手伝ったものだ。

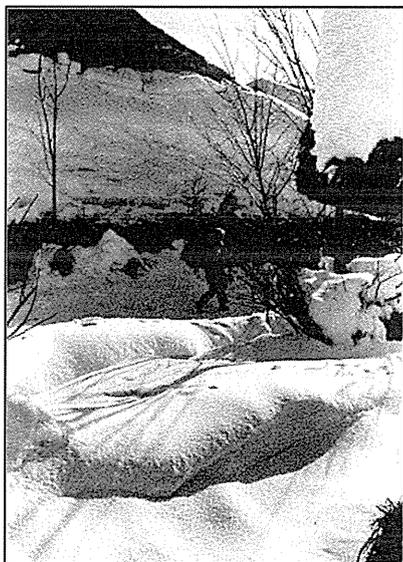
一汗かいたあとの朝食のうまかったこと、おやじには「早起きは3文の

得」と、おだてられてやったが、自分もスキーのトレーニングのつもりであったから、それほど苦痛には思わなかったし、むしろ楽しかったことのほうが多かった。

集落と集落をつなぐ道作りは大人の仕事で、道踏み当番が決められていた。子供が学校に行くその先頭に大人が4人ほどで「かんじき」でギッシ・ギッシと雪を踏み固めて道を作りながら進む、その後子供が続く、長い1本の列のラストが次の集落についたときは、立派な雪道が出来あがる。

昔は一夜明けると1mもの積雪をみたこともあったが、8時30分頃子供の通学が終わった時点で、村全体の道がきれいに踏み固められて、「道路網」の整備完了となる。

今考えてみても見事な「組織力」というべきで、素晴らしい生活の知恵であった。



1940年:雪の細野

信州の中山間地には「自然と文化」がある

私はスキーの関係で雪のない季節にもスイスなどのヨーロッパに行くことが多かった。行く先のほとんどがスキー場のあるリゾートで、パリーやチューリッヒの空港に着くと、都会の喧騒から逃げるように目的地に向かう。そしてそこに着くと親しい友人に会えることもあるが、静かなたたずまいにふれ、くつろぐことができなぜかほっとしたものである。

翌朝、冬はスキー場となる、ゆるやかな斜面の広々とした牧場を、晴れ上がっていく朝もやを追うように登ると、カラン、コロンとカウベルの音が聞こえ、草を喰む牛の群れが見えてくる。その向こうに残雪をたたえた山並みがそびえている。ふり返ると、牧場のあちこちに古びた牧草小屋が点在し、私の泊まったホテルが思ったより下に見える。

まるで「絵葉書のような風景」が広がる。冷たい空気が汗ばんだ身体を冷やしてくれる。こんなとき、私は自分の住む白馬を連想する。同じ農業と観光で暮らす村だからだろう。

こうした経験を何回かするうちに、似たような双方の風景には、はっきりとした違いのあることに気付く。ヨーロッパの風景は牧場が中心なのに比べて、白馬のそれは、水田が風景の中に大きな部分を占めていることを。

白馬の春、水を満たした田んぼ、の広がり、夏の緑の稲草、秋は田んぼの黄金色の波など、水田の四季折々の変化はヨーロッパにはない素晴らしいものを改めて感じるのである。

長野オリンピックの会場となった、八方尾根のあのダウンヒルコースの黒菱平、スタートハウスの1680m地点から下を眺めると、そのことが実感させられる。ヨーロッパに負けず劣らずの素晴らしいところなのだと再認識し自画自賛することがある。

そんな環境のなかで、私は少しの野菜作りと、減反の水田にブルーベリーを200本ほど植えてある。この頃も都会から訪れたグループが、ジャンプ競技場を見ての帰りに立ち寄って、ブルーベリーを摘んで「初めて木にある

キウリ、インゲンなども、親子連れにもがせてあげたいと思ったりする。秋には稲穂を二、三本引き抜いて「これがお米だよ」と持たせてあげたいと思う。そんな小さいことが、もうひとつの旅の思い出となるにちがいない。

そんな視線でまわりを見ると新しい発見がある。曲がりくねった細い田んぼ道や水路、そして、水田の石積みされた土手などだ。先人が人力だけで作った「汗の結晶」がそこにあることに気づく。ブルドーザーもない、一輪車さえもない、測量機械も使わずに作ったと思われる水田。それを物語るように傾斜の地形に逆らわず、中、小の様々な水田が続いている。

ヨーロッパでも、山の斜面に牧場を作るときに出された石が、境界に整えられて山と積まれて、柵のつとめにもなっていた。その牧場と隣の自然林と比べて眺めると、人力だけでつくったことが歴然で、大変苦勞して牧場にしたのを感じ、白馬の水田と同じ思いで眺めた記憶がある。

「標高3000m級の北アルプス白馬連峰は自然そのものである。その下に続く私たちが住む白馬の村にも自然がある。そして、そこには歴史をきざんだ諏訪神社があり、樹齢1000年といわれる御神木がそびえている。その下には縄文時代の住居跡が保存されている。また、集落の中には、道祖神や庚申塔、馬頭観音などの石仏がある。「長い歴史のなかに根付いた、さまざまな文化がある」この大切なことを忘れないようにしたいと、改めて白馬に生まれ育ち、生活している私にとって、ややもするとその環境や文化の素晴らしさを、忘れ見落としているのではないかと気付くときがある。「私は旅が好きです。そして、そこで最初に出会った人がいい人だと、その土地がすきになる」と言った友人の言葉を改めてかみしめながら、これからも趣味の野菜作りと、スキーを楽しみ続けていこうと思う。

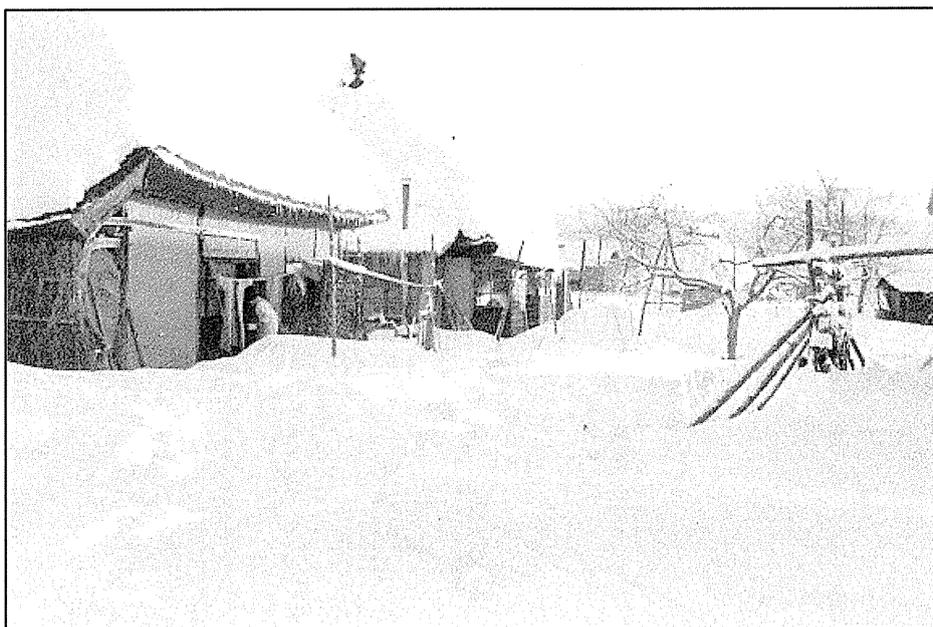
丸山庄司「わが心のふるさと信州」

単行本「信州農山村ふるさと運動推進協議会」への紀行文

昭和の対岳館



昭和の細野



父・与兵衛の影響で登山が好きになる

父・与兵衛の登山歴をたどると（白馬村村誌参考）、私の生まれた昭和8年（1933年）前後は、夏のガイドだけでなく冬期（12月から3月）にも大学の山岳部の人たちと積極的に岳に入っている。その中の一つに、昭和8年3月難波高校の2人と共に杓子岳主稜初登頂の記録である。後に日本山岳会の遠征で、マナスルに初登頂した今西寿雄さんである。

父も脂の乗り切ったときであったと思う。今西さんとは晩年まで家族ぐるみで終生お付き合いをしていた。

そのころのことを生前、母に聞いたことがあるが、田植えと稲刈りのとき以外は、ほとんど家にいなかったという。

私の記憶では、父の登山ガイドとしての、人生最後の山行きは「約1か月間の縦走」だった。父が45歳、私が17歳・高校1年生のときである。

私が、父に連れて行ってもらった最初で最後の登山が、昭和25年（1950年）7月の「白馬岳から不帰の険を経由して唐松岳の縦走」のである。もちろんテント泊りで1泊目は白馬尻、2泊目は白馬頂上小屋横のテント場、3日目は唐松小屋泊りであった。4日目の朝、五竜岳方面に向かう父たちと別れて、私は八方尾根を一人で下山した。

その父たちの「登山計画」は、テントによる踏査の縦走で、約1ヶ月の長期間であった。

メンバーは、山岳ガイドの「父・与兵衛」と「諏訪多栄蔵：登山家で著述業、旧RCC会員、日本のヒマラヤにおける書誌学的研究の第一人者」、「住吉薫：登山家で医師」の3名で、約1か月間のテントによる北アルプス縦走である。白馬岳から五竜岳に至り、五竜岳頂上の裏側から東谷を下降、黒部川の仙人ダムを渡って立山連峰に登り、さらに縦走を続け黒部川源流をたどった後、槍ヶ岳から西穂高岳までの縦走をしたのである。

そのとき下降した、五竜岳の裏側の東谷の支流を、父の名をとって「東谷与兵衛沢」と命名されたのは、同行した諏訪多栄蔵氏で、「現代登山全集4巻（P271）」にも掲載されている。

さて、話を戻して、私・庄司はその2年前の中学2年生の夏休みに、上高地の徳沢園に1日間ほど過ごした。大阪大学山岳部は、奥又白や屏風岩を中心に合宿があり、徳沢園の前のキャンプ場がベースキャンプになっていて、私も連れて行ってもらった。私は昼間のテントキーパーをして過ごしていた。その間に一人で大滝山に登山し、また涸沢から奥穂高岳には大阪大学山岳部の家田千尋さん、加藤幹太さんに連れて行ってもらった。

奥又白の合宿が終わって、帰りは全員で上高地に降りず徳本峠を越えて、「岩魚留」から島々谷の川沿いを延々と島々の集落まで歩いた。当時、幹線道路も舗装されておらずトラックやバスなどの砂埃にまみれながら苦勞してようやく島々駅に辿り着いたが、今になれば良き思い出である。

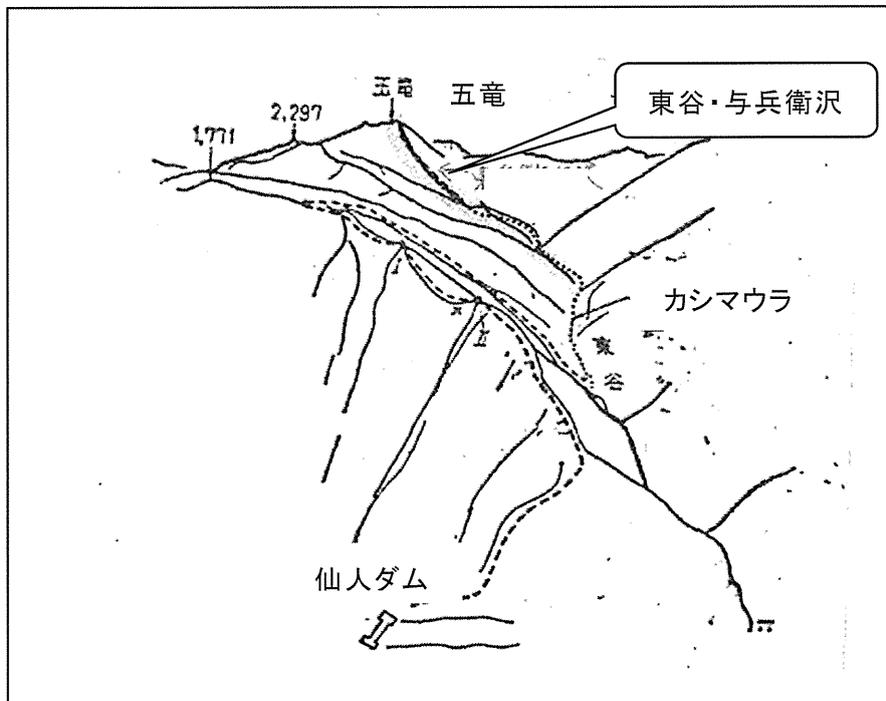
徳沢園のテントキーパーは、どうやら父が連れて行ってくれるように頼んだらしいことが後でわかった。振り返ると私が登山を好きになったのは、環境ばかりでなく、父の影響と父の陰の協力によるものであった。

私はその後、冬はスキーに打ち込み、夏は登山を楽しんだ。後に、北アルプス一帯の山岳ガイドの資格も取り、あちこちに案内もした。また、北アルプス山岳遭難救助隊員にも任命され救助活動をしたのも、今は良き思い出であり改めて父母に感謝している。



1日目：白馬尻でテント泊、左から：庄司、住吉、父・与兵衛

五竜岳東面の概念図



大阪大学山岳部の北アルプス縦走に同行して

私が高校 1 年生のとき、大阪大学山岳部の北アルプス縦走に連れていってもらった。その時の記録が見つかったので、思い出をたどりながらまとめてみた。

山 域 針ノ木峠～黒部峡谷～東沢～裏銀座縦走
年 月 1950年（S25）7月26日～8月4日
メンバー 加藤寛太、家田千尋、大久保勝巳、伊藤俊夫、細見一仁、岡本、丸山庄司

行動記録

【7月26日】

6：54 信濃四ツ谷駅発 大島輝夫、家田千尋、松久博、坪井圭之助、細見一仁、丸山庄司 針ノ木小屋～南沢出合いに向かう。
8：11 信濃大町駅着 大久保勝巳、四宮誠祐と合流。
8：30 信濃大町駅発 路線バス
9：00 平村 大出着
9：30 〃 大出発 大町営林署のトラックに乗せてもらう。
10：15 白沢着 トラックの終点10：30着
13：30 大沢小屋着 キャンプ設営 小屋の手前で関西大学に会う。
15：20 荷揚げ 大久保勝巳、大島輝夫、家田千尋、細見一仁、丸山庄司
17：50 針ノ木小屋着
18：10 〃 発
18：40 大沢小屋着

【7月27日】

9：50 大沢小屋発
12：05 針ノ木小屋着
13：30 〃 初
16：40 南沢出合い着
加藤寛太のパーティと合流。各地に分散して合宿をされていてこの南沢出合いが終結地になっていた。総勢17名である。白馬からのメンバーは定かではないが、不帰の谷に入っていたと思う。

【7月28日】

7：30 起床 昨夜から小雨が続くなか、全員休息日とする。

【7月29日】

- 7:30 伊藤俊夫、平の小屋より合流。
- 10:10 「後立山縦走」などそれぞれのグループを組み出発する。
私たちのグループは、「黒部川を遡り、東沢～裏銀座～北穂高縦走」のコースである。
- 10:30 南沢出会い初 加藤、家田、大久保、伊藤、細見、庄司
- 11:40 吊り橋を渡り平の小屋を訪ねる。岡本が合流し7名のパーティとなる。
- 13:50 平の小屋～吊り橋を戻り、黒部川右岸の藪の中、上流を目指し出発。
- 15:20 雨は降り続く、最初の沢を横切り、黒部川の激流を見ながら藪の中を遡る
- 16:30 再び小さな沢が現れる。その僅かな空地にテントを設営。
黒部川を遡り、東沢経由の山歩きの1日目が終わる。
夕食の時家田さんが、「戦後黒部川から東沢に入った記録はなく、このメンバーが最初だと思う。また東沢を中心に「黒部の山賊がいて登山用具を奪うという」噂があるとの話をされた。
- 21:00 家田、細見等は少し上の大岩の横に就寝する。

【7月30日】

- 7:30 曇り時々雨のなか出発。
- 11:20 ガレ場入り口に到着。
- 11:35 黒部川を挟むように両側から岩壁が張り出し、川幅が狭くなり激流となっている。川辺の岩壁のトラバースは不可能で、前進を阻む。ルートは岩壁手前の比較的灌木のある位置から高まきして、乗り越える方法をとることにした。しかし、私たちのいる右岸の岩壁は高く、相当のエネルギーを要する。一方左岸の岩壁の高さは20mほど?で、乗り越えやすいことがわかる。検討の結果、本流を横切り左岸に渡渉することに決定する。本流を少し下流に戻り、川幅の広い浅瀬に石を投げて水の深さを推測し安全を確かめた後、全員で手をつなぎ合い、本流を渡渉し無事左岸を渡る。
- 11:45 岩壁を高まきして乗り越える。高度は少ないが安全を配慮しザイルを使用する。
- 13:00 再び本流を渡渉し右岸に戻り昼食とする。
- 14:00 出発して45分、10mほど山道の壊れた個所を見つける。
- 15:00 第一目的地の、東沢出会いに着く。夕立のため岩陰に入る。

- 16:00 豪雨となり岩陰を利用してテントを設営する。
川辺でコメを洗っているとイワナが寄ってくる。小枝を竿に糸を垂らすと簡単に釣れた。川のよどみのところはまるでイワナの群れで養魚場の感じである。
また、東沢出合いから見る黒部川の「上の廊下」が目の前に立ちだかっている。

【7月31日】

- 8:40 東沢に向かって第一歩を踏み出すも、東沢出合いは水量が多い。出発してすぐに左岸に渡渉する。少し歩き、再び渡渉し右岸に戻る。私が渡渉のとき石の高いところを歩いたら、加藤さんから「川の底を歩け、滑って転んだらどうする」と注意を受ける。沢歩きの基本を教わる。
- 9:45 ガレ場に着き小休憩。
- 10:20 丸木橋を発見し左岸に渡る。
- 11:10 焚火の後を発見。黒部の山賊の話で、少し緊張しながら話が盛り上がる。
- 14:10 昼食を済ませ、東沢を更に遡ると視界も開けてきて、赤牛岳が見えてくる。
- 15:30 岩魚吊りの2人に会う。これが黒部の山賊？ 気を使い岩魚を7匹買う。100匁120円、高い値段に驚く。7匹で1000円だったと思う。
- 15:50 中コヤ澤出合いにでる。
- 18:00 高度も上がり、ここまで来れば山賊も来ないだろうと言いながら、東沢の水量も少なかった場所にテント設営。

【8月1日】

- 9:45 出発
- 11:15 ようやく草付きの地域に出る。
- 12:55 東沢支流からのA班は大久保、加藤、細見。東沢乗越え班はB班の岡本、伊藤、家田、庄司。ここから分かれて行動、水晶小屋後で合流する。
A班14:30、B班13:40に到着
- 14:50 大久保、庄司が水晶岳を往復、所要時間40分。
- 17:10 三俣蓮華岳には登らず下の道をたどり、三俣蓮華小屋の上方近くにテント設営。

【8月2日】

- 8:50 三俣蓮華小屋出発
- 10:30 双六小屋到着

- 1 1 : 0 5 縦沢ピークで昼食
- 1 2 : 2 0 縦沢ピーク
- 1 5 : 1 0 槍ヶ岳肩の小屋到着
伊藤、岡本槍沢を下り別行動。
- 1 7 : 0 0 槍ヶ岳肩の小屋横でキャンプ。食料は食べ尽くし何も無い。肩の小屋で分けてもらいささやかな夕食。阪大が積雪期に登山し、穂刈さんに山小屋の状況報告をしていたので面倒見てくれた。

【8月3日】 朝の天候、曇り時々雨、風強し。

- 7 : 4 0 肩の小屋から飯盒にご飯、おかずを詰めてもらい出発。北穂高岳に向かう。
- 8 : 3 0 中岳到着
- 1 0 : 0 5 大キレット到着。加藤さんが休憩中に、大キレットから北穂高小屋に続く登攀ルートを眺めながら、涸沢経由をやめて本谷を下ろうと提案、決定する。
- 1 0 : 3 0 大キレット～横尾本谷を下る。急斜面で草付き。所々にある灌木につかまったりして、競うように下降する。転倒したら終わりだ。ようやく右股出合いが見えてくる。
- 1 1 : 5 0 全員転倒もせず右股出合いに着きホット
- 1 3 : 0 0 横尾の岩小屋で昼食。
- 1 5 : 0 0 徳澤園着 遠征（合宿）最終日のテント宿泊地となる。
徳澤園は阪大が毎年奥又白などに入っていて、ベースキャンプ地にしているの、徳澤園の上条さんが歓待してくれた。
※ 私が中学2年生の時、阪大山岳部に徳澤園に連れてきてもらい、ベースキャンプの留守番をし、大滝山に登ったり、穂高岳に連れて行ってもらった。帰りは徳本峠を越えて島々に出た思い出がある。

【8月4日】

- 8 : 3 0 徳澤園発
- 9 : 3 0 上高地着
- 1 1 : 0 0 // 発 バスにて島々へ。松本駅で解散。

後記

伊藤正一著（三俣蓮華小屋経営）「黒部の山賊」によれば、私たちが東沢で会ったイワナの釣り人は、現在の大町市平の人だったのではないかと推察している。「黒部の山賊」は興味深く一気に読んだ記憶がある。

5月の白馬大雪渓を滑る

1957年(昭和32年)白馬村の観光映画、「白馬岳の春スキー」の撮影に同行した。4月下旬の連休に、梅池から入り、白馬岳山頂近くから猿倉小屋までの2泊3日の「スキー滑降」のスケジュールとなっていた。

メンバーは、福原フィルム社長の福原健司、近藤隆治、スキーヤーは地元白馬の峯村孟男、丸山庄司ら一行7名だった。2泊3日のスケジュールで計画された。

1日目は落倉集落から入山し、梅池小屋目指して、キスリングを背負い、スキーを担いで登る。梅池小屋には3時頃到着し、玄関の鐘を鳴らし撮影する。夜は明日の天候を祈念して盃をあげ、大変盛り上がる。

2日目も好天で撮影には好条件である。天狗原から白馬乗鞍岳を経て白馬山頂に向かうが、カメラの近藤さんは、一行の先になったり、横に着いたり撮影は大変である。

白馬山頂に着き、白馬山荘には午後2時ころ到着した。山荘前から眼下のお花畑は、まだ残雪で、白一面の斜面がそのまま大雪渓に続いている。明日のことを想像し期待が高まる。白馬山荘で落ち着いた後、山荘近くの旭岳(2867m)の残雪でスキーを楽しむシーンも撮影する。天気予報によると明日も好天とのこと楽しみである。

3日目、素晴らしい好天である。山荘前でスキーを付け準備完了。福原さんの指示で滑ることになる。山荘前から広大な斜面が広がり、小雪渓の急窮・面まで続いている。大きなターンでそれぞれ自由につかず離れずに滑れという。滑っていても楽しい、一気に小雪渓付近まで来た。夏は険しい小雪渓と葱平は、一面が大きな急斜面となっていて、恐怖を感じさせない。私たちはさらに、大雪渓の上部付近まで滑り降りた。

福原さんも上機嫌である。所々で集まっては指示を受けて滑るのを繰り返しているうちに、白馬尻の少し上部まで滑り降りて休憩にした。

私はこの休憩場所に興味を持っていた。というのは、1か月ほど前の3月上旬に、杓子尾根に米国の軍用機が墜落して、話題になっていた。こから見ると、杓子尾根の軍用機は、まるでトンボが止まっているようだ。今年の杓子尾根は遭難など様々なことが1か月前に発生していたが、後にふれることにする。

話を戻して、スキー滑走は長走り沢まで滑り、夏道沿いに少し歩き、最後はブナ林の斜面を滑って猿倉小屋に滑り込んで終了した。こうして、「白馬岳の春スキー」の撮影は、天候にも恵まれ無事終了した。

フィルムは、翌シーズン東京をはじめ各地の映画会で上映されたと聞いた。しかし、私が白馬で見た記憶がない。

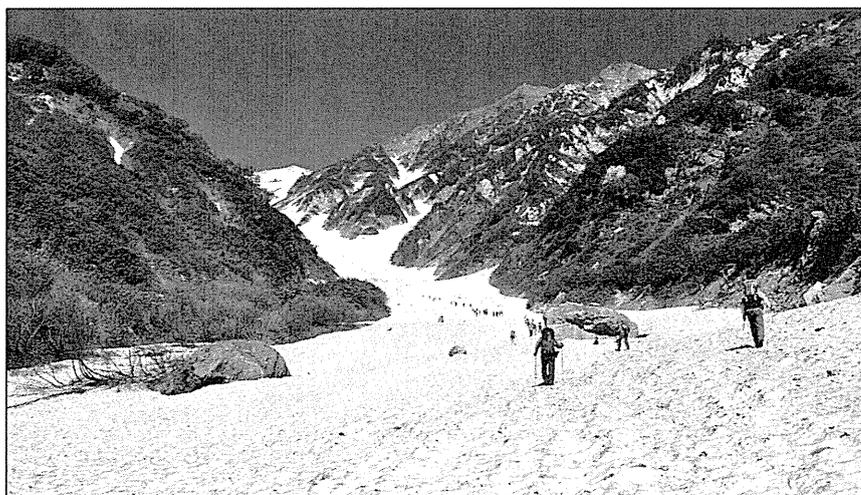
さて、先に触れた杓子尾根の軍用機墜落事故は、その後様々な憶測を呼んだ。上官が搭乗していて、機密なものがあるらしいとかなど、しかし、知らぬ間に遺体や大切なものは、搬出されていたと聞いた。機体の搬出は遅れたと思う。

この杓子尾根は、3月の春山には、大学の山岳部などが合宿に入ることが多い。この年も明治大学が入山し、遭難が発生した。OBや関係者が捜索救助に入り、その捜索中に雪崩事故が発生し、二重遭難となってしまった。

噂だが、雪崩による二重遭難の発生と、杓子尾根に追突した軍用機との関係を疑う人もいたが、うやむやのうちに立ち消えた。

その3月30日、私の友人の、阪大山岳部OBが結婚し、なんと新婚旅行に、杓子岳に挑んだ。私も小日向までボッカでサポートし、岳樺を利用してテントを設営して帰ったが、この日も雪が降り続き、猿倉のブナ林を出ると、新雪が50cm余もあった。長走り沢からの雪崩の心配のない、夏道のある小日向側の斜面に取り付いたが、急斜面で積雪が多く、キックターンに苦労しながら登った記憶がある。

丸山 庄司



白馬大雪渓（白馬村HPより）

白馬岳のヘリスキー

連休前の4月28日はピーカンの雲一つ無い晴天に恵まれた。ヘリコプターの中から見る白馬大雪渓は雪が幅広く残り、しかも、白馬尻から下方の猿倉の辺まで残雪は続いている。ヘリは高度をグングン上げる、小雪渓が見えてきた。この小雪渓では夏山登山の案内のとき、辛い急斜面の登りと、ステップを切った雪渓の横断での緊張を思い出す。いま真下に見えるその小雪渓と大雪渓を繋ぐ葱平は雪がベッタリと張りついて岩ひとつ見えない大急斜面となって、そのまま大雪渓に連なっている。

この滑走はオーバースピードにならないように注意しようと自分に言い聞かせながら食い入るように見る。目を前方に移すと小雪渓から続くお花畑と白馬山荘までは、広大で緩やかな白一面の斜面が続いているのではないか。この時期は当たり前とは言うものの、現実に見ると、そのスケールの大きさに圧倒されそうだ。

今日は、ヘリを利用して白馬頂上近くの白馬山荘前から猿倉山荘まで約15キロの春スキーを満喫しようと、八方尾根スキースクールが企画、JTBと共催したのである。近年、シーズン後半になるとヨーロッパやアラスカなどの氷河に出かける海外遠征組も増えている。しかし、日本でも北アルプスならば時期さえ選べばスケールも負けない大自然がある。

しかし、問題は登りの輸送だった。シャモニーのバレーブランシュはケーブルを利用してエギーユ・デュ・ミディから16キロのコースが有名だが、登山電車やケーブルで長いコース滑れるところはあちこちにある。また、カナダなど専用のヘリやセスナ機が常駐しているところもある。

2月初旬恒例の八方尾根火祭りも盛大に終わり、スキースクールのスタッフの慰労会で今日のヘリツアーの話しが出たのであった。

スキーシーズンもたけなわの日本のように小さな斜面で芋を洗うようなスキーで満足しないで、もっとノビノビとしたスキーを楽しんでもらうことを考えよう。なんとか実現できないかと話しがはずむ。スキースクールでは2年前ヨーロッパのスキー場の視察でサンアントン、ツェルマット、シャモニー

などをまわり、見て体験してきているので話しが早い。地元白馬の大雪渓でそれを実現しようということになったのである。

ヘリで上がり約15キロを滑って猿倉山荘でスキーを外し、目の前のバスを利用すれば30分で白馬駅に戻ることができる。よいアイデアだと話しはトントンと進み、担当をきめ準備に取りかかることになった。

まず問題の「輸送」は、夏山開きのため山頂小屋に物資輸送に来ていた「中日本航空」のヘリをチャーターしている白馬山荘を運営する「白馬館」の理解をえて、ヘリに乗せてもらえることで解決できた。荷揚げを中断しての協力には頭が下がる。

「日程」は1日1回のみ行なうこととし、参加資格はバッチテスト1級程度のレベルと少し厳しくした。

「安全対策」は八方尾根スキースクールのメンバーも原則全員参加をしてガイドを兼ねることになった。また、新雪があれば表層雪崩が出やすいし、春のこの時期は落石の危険もある。その対応には、スキースクールのメンバーのなかから、山岳ガイドの資格を持つベテラン2名が、前日に猿倉から大雪渓を登りつめた葱平の取りつき辺まで登り、下調べし安全確認をすることにした。募集人員は1回約50名とし、10名を1組として各組にリーダーとサブリーダーがつき、更に残ったスタッフがサポートすることにした。

「費用」は1万円、その内訳は、ヘリ代、送迎バス代、スキー傷害保険(保証700万円)、軽飲食物というものである。

拇池からヘリコプターは1回に5人程を乗せ10分余りで山頂へとピストン輸送をする。歩けば半日はかかるだろう、まさに文明の利器に預かり興奮した笑顔が、頂上の「白馬山荘」前にそろった。1時間程で全員が集めたのである。

さあ、いよいよ滑降開始である。その前に富山側の朝日岳の残雪斜面で足慣らしをかねて撮影に応じたりして山頂のスキーを楽しむことにした。滑る様子を見るに技術の心配はなさそうだ。ただ、斜面も大きいし周囲も広く、あまりにもスケールがでっかいので次ぎの2点だけを指示した。

(1)大斜面なので自分のスピード感がわからなくなり易い、オーバースピー

ドにならぬよう気をつけること。

(2)各組のリーダーの指示に従うように。

この2つだけをお互いに守る約束の確認をする。

山荘前からお花畑の斜面はどの組も楽しそうに群れになって高度を下げていった。まだこの時期は夏の雪渓のようにスプーンカット状でなく、硬くしまった雪の表面だけが2~3cm解けて柔らかくなり、もっとも滑りやすく安全性の高い雪質状況になっているのだ。

小雪渓手前で全員ストップし、斜面状況を調べることにした。小雪渓の斜度は30度以上はゆうにありそうだ。オーバースピードと、他の人が削って落ちる雪にスキーを取られて転倒しないように注意しなければならない。それぞれが、間隔をあけて滑ることにした。さすが実力そろいで、誰も転倒せずに全員が滑り降りることができた。斜面が横に広いので恐怖感もなく、心配する程のこともなかったようだ。

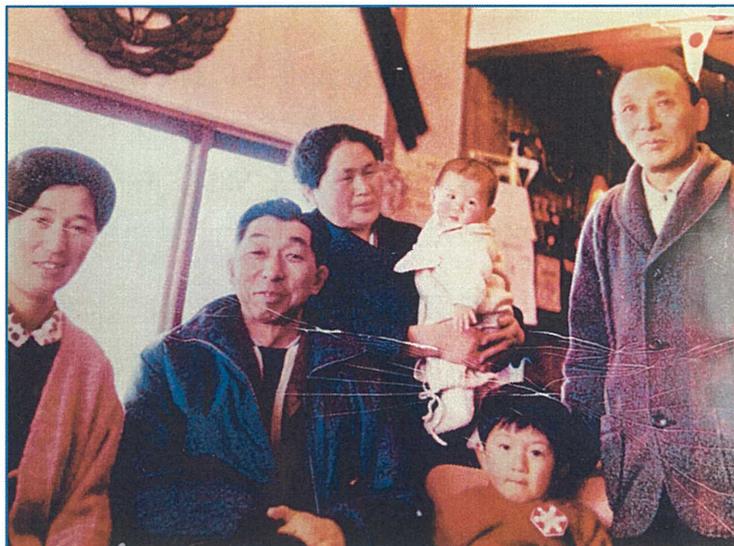
しかし、滑り終わって下から見上げる小雪渓は、やはり長い急斜面で圧倒される。お互いにシュプールを振りかえりながら、どの顔にも充実感があふれていた。

これから下の大雪渓は白馬尻まで直線で5キロほどか？ 今までの緊張はなくなり、それぞれ楽しみながらのんびり滑っている。ただ、白馬尻に近くなると表面の雪は5cm以上も柔らかくなり滑りにくい状況になってきた。この好天の中で、標高も下がり正午を回っていれば当然のことでもある。

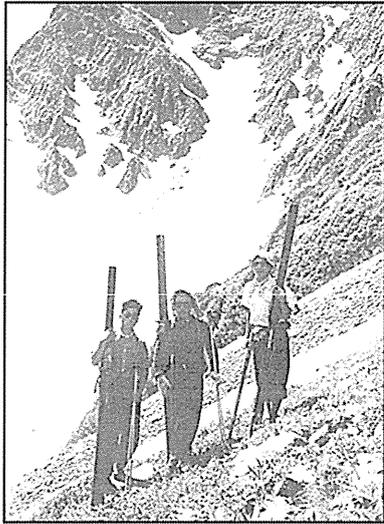
あんなにゆっくり滑ったのに、所要時間1時間程で白馬尻についてしまった。軽い昼食をとりながら大休止となった。どの顔も満足度万点のようである。

いま我々が休憩している所は夏山登山の休憩所、「白馬尻小屋」の場所だが、まだ5mもの雪の下だ。この状況ではここに休憩小屋が建てられるのは6月になるであろう。

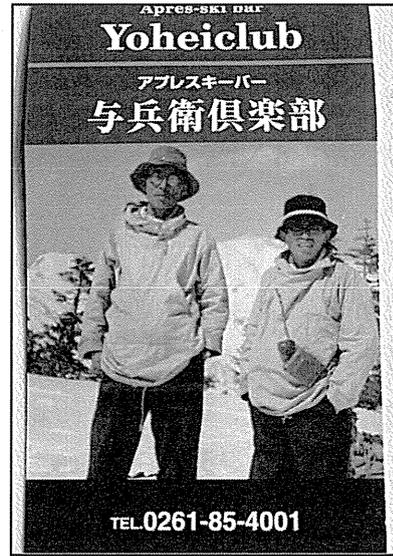
高松宮様をお迎えして



左より、永子、高松宮様、母まさえ、美穂、徹也、父与兵衛



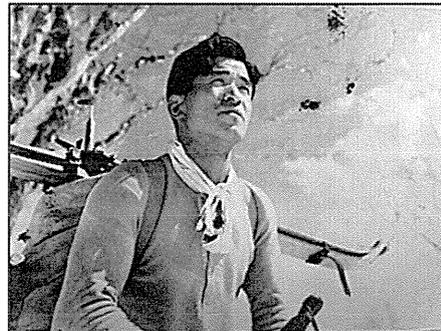
穂高小屋へ向かう猪谷さん(中央)、杉山さん
(左)、山崎さん(26年)



丸山与兵衛、住吉薫



猪谷千春さん ジャンプ(志賀高原・27年)



義父・郷津長平



福島・猪苗代にて 吉富ご夫妻、永子・庄司

吉富さんに感謝して

前書きにも述べたように、妻の永子が長期入院せざるを得なくなった。退屈しのぎに「山歩きのメモ」をまとめたので、親しい友人で山好きでもある吉富さんに渡したのが、次に述べることのはじまりとなった。彼から電話が入り、「製本して冊子にしたい」という。夢にも思っていなかったことである。吉富さんは、若い頃から日本アルプスを歩き回っていた。なかでも白馬村新田の登山家である降籟義道さんと仲間3人で、白馬岳の右下にある「馬型岩壁」をスキーを担いで初登攀し、稜線から白馬沢をスキーで白馬尻まで下降するなど、一流のアルピニストである。

吉富さんとは、妻の永子を通じて知り合い、気心が合い、長いお付き合いが今も続いている。親しい友人である。有難いことである。

丸山庄司

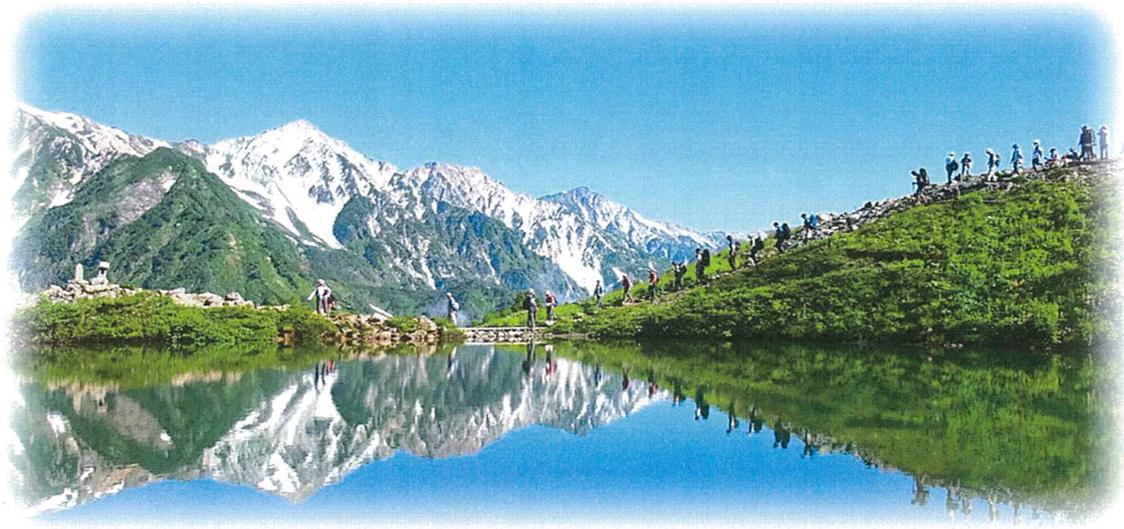
敬愛する「岳人・丸山庄司」さん

始まりは、対岳館のロビーで聞いた「黒部の山賊」。その後お聞きする数々の「岳」に心わくわく胸躍る思いで聞き入り、これは残すべき「貴重な山の話」と確信し、是非とも冊子にとお願いした次第です。お預かりした30編の「岳物語」は、いずれもとても貴重な山岳紀行・山行記録で感動しました。何よりも各ページ、行間には「岳人・丸山庄司」さんの優しさ、友人・仲間への思いやり、家族への愛情が溢れており、読後の「さわやかな幸せ感」は格別です。

スキー界の「丸山庄司」さんは私にとりまさに雲の上の人、今回はスキー界の皆さんのご存知ない「岳人・丸山庄司」さんをご紹介しますお手伝いができこの上ない喜びです

奥様のエピソードを一つ。福島県・猪苗代スキー場へご夫妻を案内する機会がありました。ゲレンデに着くと、笑顔の奥様の周りにはあっという間に人だかり。まるでアイドルです。しかも彼らはいずれも日本を代表するトップスキーヤーばかり。永年、日本のスキー界を支えて来られたホテル対岳館とご夫妻のすてきなお姿を拝見しました。もう一つ、ご両親のいつも絶えない優しい笑顔も忘れられません。まだまだたくさんの「岳物語」がありそうです。次の機会が楽しみです。

吉富 明



タイトル 私の山歩き 岳・友・家族

発行 2025年8月8日

著作 丸山 庄司

編集補助 吉富 明

印刷 株式会社丸菱行政地図
東京都台東区池之端2丁目51-4
03-5815-4830

写真 一部はインターネット公開画像及び白馬村
・小谷村・長野県のHPより